

信頼と友情への第一歩

平成9年度アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国青年招へい事業

開講式



●国際協力事業団より歓迎のあいさつ



●期待に胸をふくらませて

共通プログラム



●日本語を学ぼう



●熱心に日本語を勉強する青年



●初めての遠征体験に力が入ります



●資料の一冊も聞く青年(中国)

分野別都内プログラム



●専門分野はやはり興味があります。



●リハビリセンターの視察



●皆で楽しく救助訓練



●すごいですね(マルチメディア体験)



●はい、チーズ



●自然を背にして討論会

合宿セミナー



●私たちに、言葉の壁はありません。

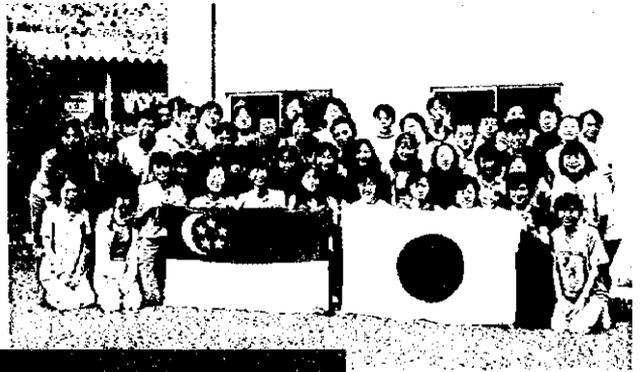


●合唱も楽しい思い出です。

分野別地方プログラム



●小学生と仲良くなりました。



●両国友好のあかし



●上手くひけますか？



●きれいですね。

ホームステイ



●たくさんリンゴがとれました。



●一家団らん



●ホームステイ先の玄関にて



●国は違っても二人は家族です。



●すっかりうちとけました。

見学旅行



●宮島にて



●瀬戸大橋をバックに“はいチーズ”



●千羽鶴の意味をかみしめて



●秋の金閣寺

歓送会



●国際協力事業団より参加証の授与



●仲良くなった人たちと



●歌を披露!



●楽しい思い出とともに



●息の合った美しい踊り

青年招へい事業



1154059(8)

はじめに

「青年招へい事業」は、国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、アセアンをはじめ、アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国などから、将来の国造りを担う青年を、専門分野別に1カ月間招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、ホームステイ受入家族などとの幅広い交流を通じて相互理解を深め、信頼と友情を築くことを目的としています。

招へい国は当初アセアン6カ国でしたが、現在では太平洋諸国・地域、ミャンマー、中国、韓国、南西アジア諸国、モンゴル、アフリカ諸国、カンボディア、ラオス、ヴィエトナムのインドシナ3国、および中南米諸国が加わり大きな広がりをもってまいりました。

平成9年度は、1,593名の青年を受け入れ、昭和59年度より平成9年度までの14年間で、日本を訪問したアジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国の青年は16,602名に達しました。これはひとえに、関係各方面の皆様のご協力と温かいご支援によるものと、心からお礼申し上げます。

本報告書は、招へい青年、合宿セミナーに参加した日本青年およびホームステイを引き受けていただいた全国の家庭の皆様から寄せられた感想文を中心に、招へい青年の1カ月の滞在記録をとりまとめたものです。本報告書が本事業のさらなる発展の指針となり、また皆様の良き思い出の一助となれば幸いです。

なお、本報告書は今年度の全招へい青年および各国の関係者にも送付させていただく予定です。

最後となりましたが、心温まるご感想、ご意見をお寄せいただいた皆様ならびに関係者の方々に重ねて厚くお礼申し上げますとともに、「青年招へい事業」がさらに有意義な交流プログラムとなりますよう、今後ともご支援、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

平成10年3月

国際協力事業団
研修事業部
部長 森本 勝

目 次

はじめに

1. 青年招へい事業—アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国—

- (1) 計画の概要.....7
- (2) 平成9年度青年招へい実績一覧.....12
- (3) 青年招へい事業 国別年度別受け入れ実績.....14

2. 招へい青年の印象

アジア

ブルネイ.....	17
インドネシア.....	19
マレーシア.....	22
フィリピン.....	26
シンガポール.....	29
タイ.....	33
バングラデシュ.....	36
ブータン.....	37
インド.....	37
モルディヴ.....	38
ネパール.....	38
パキスタン.....	39
スリ・ランカ.....	39
モンゴル.....	40
ミャンマー.....	40
カンボディア.....	41
ラオス.....	41
ヴェトナム.....	42

太平洋諸国・地域

フィジー.....	41
ニウエ.....	45
バプア・ニューギニア.....	46
トンガ.....	47

アフリカ

コートジボアール.....	47
エジプト.....	48
ギニア.....	48
モーリシャス.....	49

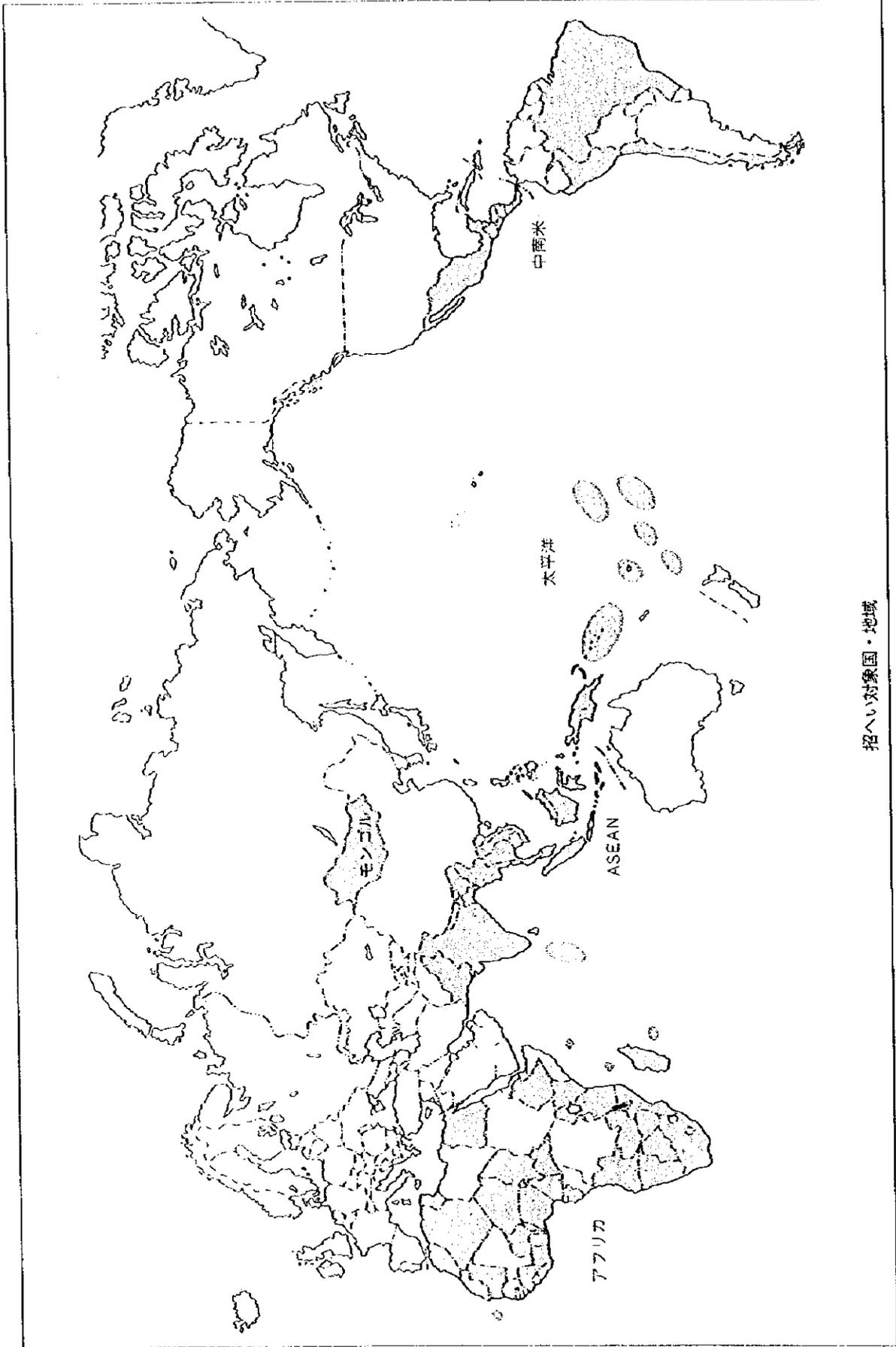
中南米

ブラジル.....	49
チリ.....	50

3. 合宿セミナー参加日本青年の声.....51

4. ホストファミリーの思い出.....55

JICA関係機関連絡先61



招へい対象国・地域

1. 青年招へい事業

アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国

(1) 計画の概要

1) 目的

青年招へい事業は国際協力事業団 (JICA) が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、これら諸国の未来の国造りを担う青年を専門分野別に 1 カ月間わが国に招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、これらの参加青年が日本の同世代の青年との交流を通じ相互理解を深め真の友情と信頼を培うことを目的とする。

2) 招へい事業

(a) 実施方法

a) 招へい人数

平成 9 年度は、ASEAN 6 カ国より各 150 名 (ブルネイは 50 名) の 800 名、ミャンマー 20 名、パプア・ニューギニア、フィジーをはじめとする太平洋 14 カ国・地域より計 90 名、インド、パキスタンをはじめとする南アジア 7 カ国より 100 名、モンゴルより 10 名、アフリカ諸国 47 カ国・1 国際機関より 100 名、ヴェトナムより 100 名、カンボディアより 30 名、ラオスより 20 名、中南米諸国 11 カ国より 50 名の合計 1,320 名を招へいする。

b) 招へい対象者

以下の分野の指導的立場にある 18～35 歳の青年。

ア. ASEAN 6 カ国

(i) 国別グループ

経済 A (マレーシアは経済経営) : 経済官庁公務員、貿易実務関係者、経済学専攻の学生等

経済 B (マレーシアは中小企業) : 中小企業等産業関連の青年労働者 (マレーシアは産業関係の技術研究開発従事者も含む)

教育 : 教員、教育行政公務員、教育学専攻の学生、文化・スポーツ関係者

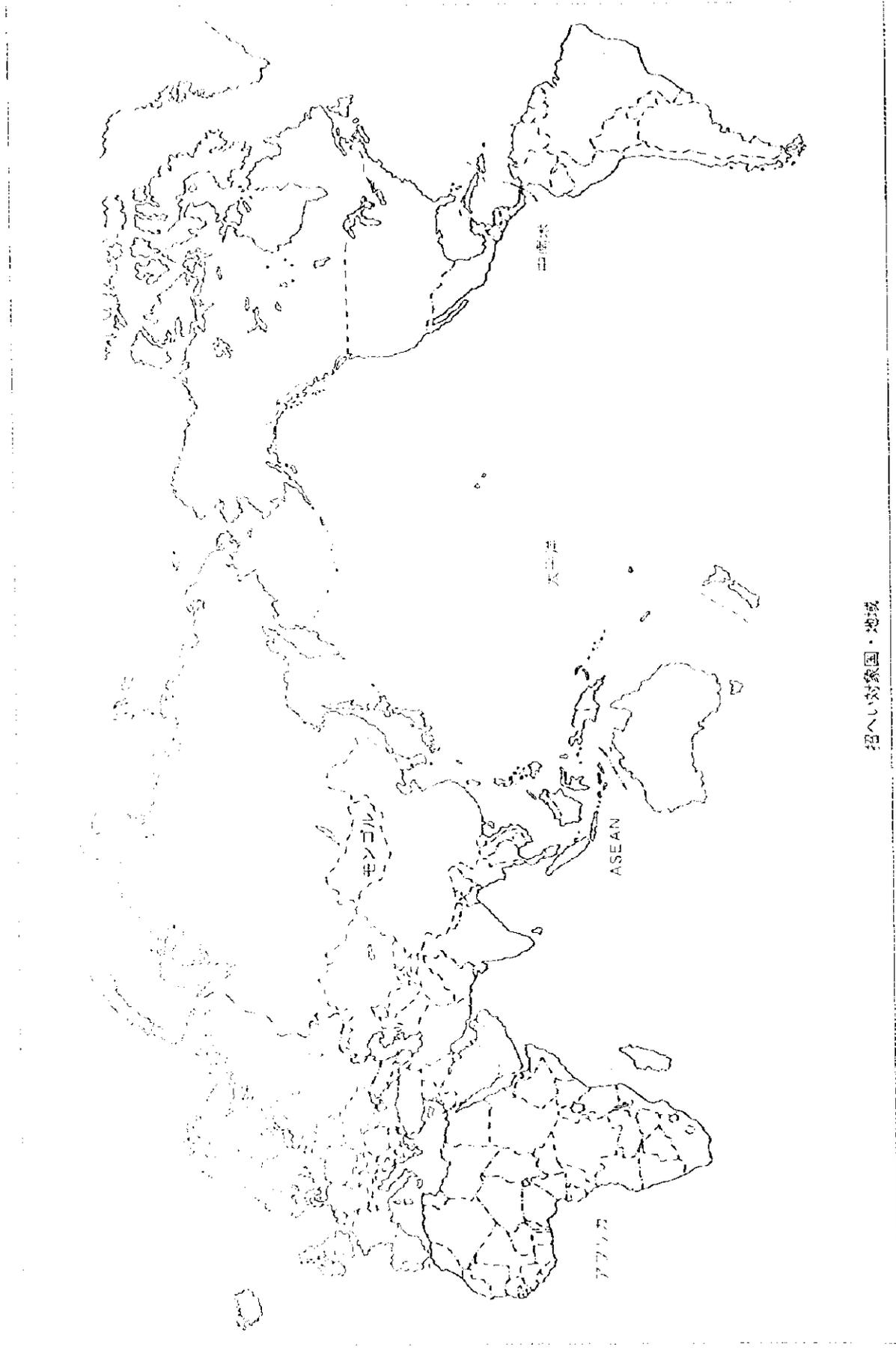
社会開発 : 青少年事業の活動者、地域振興・観光開発関係者、社会開発に従事する公務員等、社会学専攻の学生 (マレーシアは科学技術開発 : 科学技術開発関係公務員、科学技術開発関係分野専攻の学生)

農業 (マレーシアは農業開発) : 林業・水産を含む農業従事者、農業団体職員、農業関係公務員、農学専攻の学生等

(ii) 混成グループ

環境保全 : 環境行政公務員、環境保全関連実務者

社会福祉 : 社会福祉公務員、社会福祉学専攻の学生、社会奉仕関係者



招へい対象国・地域

7. 青年招へい事業

アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国

(1) 計画の概要

1) 目的

青年招へい事業は国際協力事業団（JICA）が開発途上国を対象に実施する技術協力の一環として、これら諸国の未来の回造りを担う青年を専門分野別に1カ月間わが国に招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、これらの参加青年が日本の同世代の青年との交流を通じ相互理解を深め真の友情と信頼を培うことを目的とする。

2) 招へい事業

(a) 実施方法

a) 招へい人数

平成9年度は、ASEAN 6 カ国より各150名（ブルネイは50名）の800名、ミャンマー20名、ハブア・ニューギニア、フィジーをはじめとする太平洋14カ国・地域より計90名、インド、パキスタンをはじめとする南西アジア7カ国より100名、モンゴルより10名、アフリカ諸国17カ国・1国際機関より100名、ウエストナムより100名、カンボディアより30名、ラオスより20名、中南米諸国11カ国より50名の合計1,320名を招へいする。

b) 招へい対象者

以下の分野の指導的立場にある18～35歳の青年。

ア、ASEAN 6 カ国

(i) 国別グループ

経済A（マレーシアは経済経営）：経済官庁公務員、貿易実務関係者、経済学専攻の学生等

経済B（マレーシアは中小企業）：中小企業等産業関連の青年労働者（マレーシアは産業関係の技術研究開発従事者も含む）

教育：教員、教育行政公務員、教育学専攻の学生、文化・スポーツ関係者

社会開発：青少年事業の活動者、地域振興・観光開発関係者、社会開発に従事する公務員等、社会学専攻の学生（マレーシアは科学技術開発：科学技術開発関係公務員、科学技術開発関係分野専攻の学生）

農業（マレーシアは農業開発）：林業・水産を含む農業従事者、農業団体職員、農業関係公務員、農学専攻の学生等

(ii) 混成グループ

環境保全：環境行政公務員、環境保全関連実務者

社会福祉：社会福祉公務員、社会福祉学専攻の学生、社会奉仕関係者

保健医療：医師・看護師等医療従事者、医学専攻の学生

行政A：中央・地方政府の行政官

経済：エコノミスト、貿易実務関係者

教育：教員、教育学専攻の学生、教育関係者

イ、太平洋諸国・地域、南西アジア諸国、モンゴル、ミャンマー、カンボディア、ラオス、ヴィエトナム、中南米

勤労青年：企業等勤労者、公務員、ジャーナリスト

経済：企業等勤労者、公務員、ジャーナリスト

公務員：他の分野に該当しない一般公務員

教員：教育機関教員、教育関係公務員（ヴィエトナムは教育：職業訓練、社会教育、社会福祉、文化、報道分野等の従事者、研究者、学生を含む）

保健医療：医師・看護師等医療従事者、医学専攻の学生

社会福祉：社会福祉公務員、社会福祉学専攻の学生、社会奉仕関係者

農業：農業従事者、農業団体職員、農業関係公務員、農学専攻の学生等（ラオスは農業関係公務員のみ）

ウ、アフリカ

教員：高等学校もしくは中学校の女性教員

公務員：経済開発関係公務員

c) 招へい期間

約1カ月。来日前、数日間の現地オリエンテーションプログラムを実施。

d) 受け入れ時期

1997年5月から1998年2月

3) プログラム概要

(数日間)	現地オリエンテーションプログラム	日本でのプログラムについての説明 日本語の日常会話の学習 渡航に係る説明等
来日	共通プログラム	日本の全体像について、正確な理解を促進するための文化、経済、歴史等の講義及び施設見学
(約一カ月間)	都内 分野別プログラム	招へい分野の講義や関連施設の視察、研修
	分野別プログラム 合宿セミナープログラム	日本の同世代同分野の青年との意見交換、交流の場
	地方 分野別プログラム	招へい分野の講義や関連施設の視察、研修及び地方青年との交流等のプログラムの展開
	ホームステイプログラム	日本の家庭生活の体験
帰国	見学旅行プログラム	日本の文化、伝統、歴史等を理解するための見学旅行
	評価プログラム	全プログラムに関する評価会

4) アフターケア事業

「青年招へい事業」により日本に招へいた青年が、帰国後も対日理解を増進し、日本の同世代の青年たちとの友情を持続させるよう、青年の帰国後、以下のアフターケア事業を実施している。

(a) 文献供与

帰国青年に対し、日本でのプログラム内容を取りまとめた「交流レポート」や青年招へい事業広報誌「Dear Friends」などの送付を行い、帰国後も対日理解が継続されるよう、情報提供を実施している。

(b) 各国同窓会の設立

各国の帰国青年によって構成される同窓会設立を促進し、同窓会名簿の作成、新規招へい青年の現地プログラムへの協力、帰国青年のための総会及び会報作成等の活動を同窓会が主体的に実施するにあたり、所要経費負担をするなど側面的支援を行っている。ブルネイ、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール及びタイではすでに同窓会が設立され、パプア・ニューギニアその他の太平洋諸国・地域や南西アジア諸国においては、準備中あるいはその機運が盛り上がっている。

(c) 同窓会交流連絡会

各国の同窓会の連携を図ることによって、各国同窓会活動を充実し、日本の招へい事業の効果を継続的、多角的に発展させるため、各国同窓会が一堂に会して交流連絡会を開催するにあたり、日本側は旅費等の経費面で支援するとともに、日本側代表者を派遣し、各国代表者との包括的な意見交換等を行っている。なお交流連

絡会は、現在のところ、同窓会が設立されているASEAN諸国間で行われており、1988年に第1回連絡会がインドネシアで開催され、その後、毎年各国持ち回りで実施されている。

(d) アフターケア・チームの派遣

青年の招へいに中心的役割を果たした交流青年、ホストファミリー、関係機関担当者から構成される日本青年団を各国に派遣することによって、帰国青年の日本理解をフォローアップするとともに、受入関係者が各国の実態を把握することによって、より効果的なプログラム策定に役立つ。また、これらアフターケア・チームの派遣により、片側通行であった交流事業を相互に発展・拡充させ、一層の信頼と友情を深める。平成9年度はASEAN諸国及び中国に5チーム派遣する。

(2) 平成9年度青年招へい実績一覧

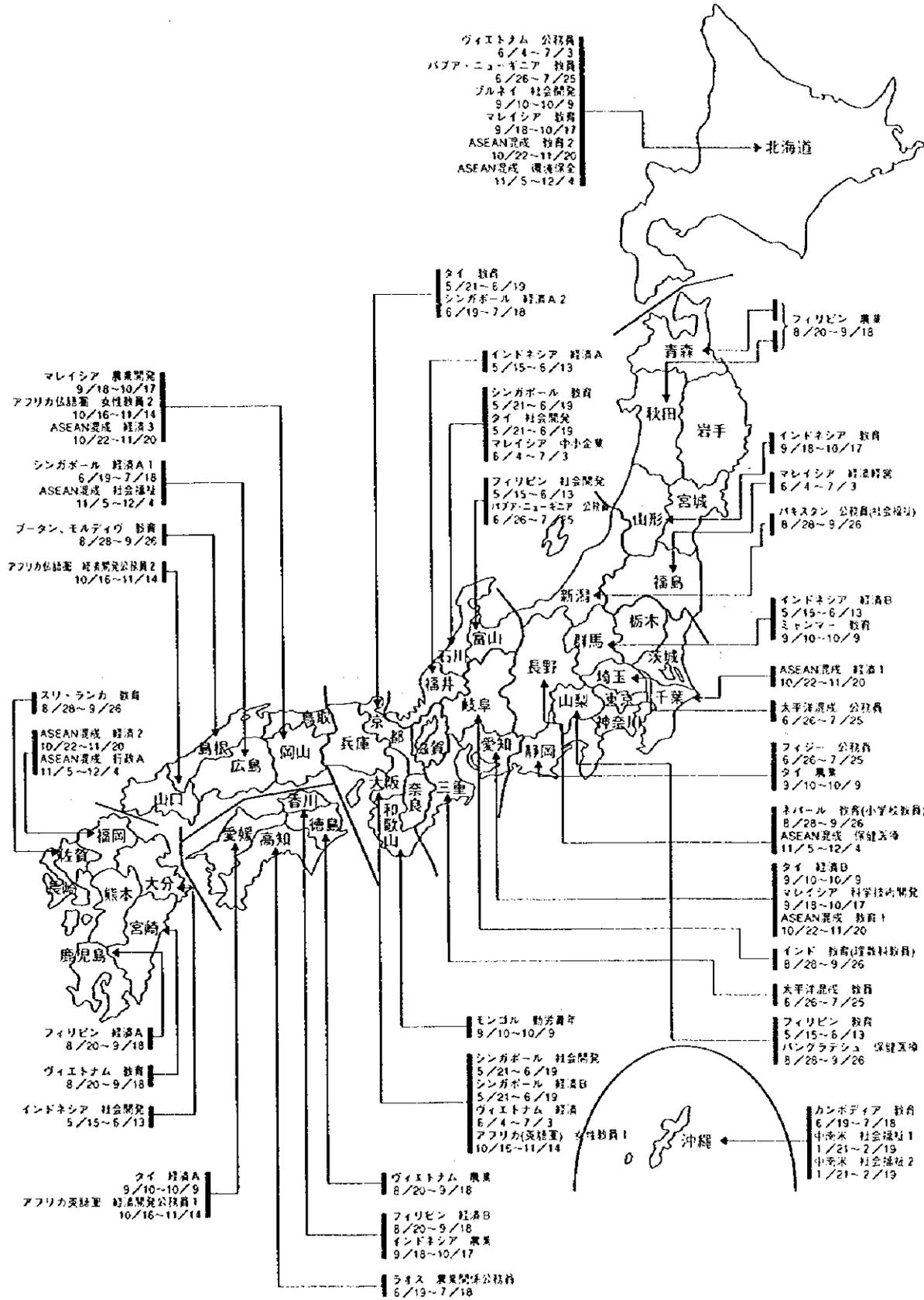
受入時期 陣・人数	国名	分野	人数	実施協力団体	実施県	地方団体
5月15日 ～ 6月13日 1陣 116人	インドネシア	社会開発	25	日本ユースホステル協会	大分	大分県海外協会
	インドネシア	経済A	20	日本経済青年協議会	福井	福井県国際交流協会
	インドネシア	経済B	24	勤労厚生協会	群馬	アセアン青年招へい事業実行委員会
	フィリピン	教育	22	青少年育成国民会議	山梨	青少年育成山梨県民会議
5月21日 ～ 6月19日 2陣 117人	フィリピン	社会開発	25	国際交流サービス協会	富山	富山県国際センター
	シンガポール	教育	21	世界青少年交流協会	石川	小松市国際交流協会
	シンガポール	社会開発	25	勤労厚生協会	大阪	大阪市青少年国際交流協議会
	シンガポール	経済B	24	日本国際協力センター	大阪	日本国際協力センター大阪支所
6月4日 ～ 7月3日 3陣 100人	タイ	教育	22	青年海外協力協会	京都	青年海外協力協会近畿支部
	タイ	社会開発	25	日本友愛青年協会	石川	石川県国際交流協会
	マレーシア	公務員	25	公務研修協議会	北海道	北海道YMCA
	マレーシア	中小企業	25	日本ユースホステル協会	石川	石川県ユースホステル協会
6月19日 ～ 7月18日 4陣 91人	マレーシア	経済	25	国際交流サービス協会	大阪	太平洋人材交流センター
	マレーシア	経済経営	25	青少年育成国民会議	福島	福島県青年海外派遣友の会
	マレーシア	経済経営	25	青少年育成国民会議	福島	福島県青年海外派遣友の会
	マレーシア	中小企業	25	日本ユースホステル協会	石川	石川県ユースホステル協会
6月26日 ～ 7月25日 5陣 88人	シンガポール	経済A1	20	ユースワーカー能力開発協会	広島	しょうばら国際交流協会
	シンガポール	経済A2	21	日本経済青年協議会	京都	京都ユースホステル協会
	カンボディア	教育	30	青少年育成国民会議	沖縄	沖縄県国際交流財団
	ラオス	農林水産	20	高知県国際交流協会	高知	高知県国際交流協会
7月2日 ～ 7月31日 6陣 97人	ラオス	農林水産	20	高知県国際交流協会	高知	高知県国際交流協会
	太平洋混成	公務員	23	国際交流サービス協会	埼玉	上尾市国際交流協会
	太平洋混成	教員	21	日本国際生活体験協会	三重	三重県国際交流財団
	バブア・ニューギニア	公務員	10	世界青少年交流協会	富山	富山県世界青年友の会
8月20日 ～ 9月18日 7陣 117人	バブア・ニューギニア	教員	19	青年海外協力協会	北海道	帯広青年会議所
	バブア・ニューギニア	教員	19	青年海外協力協会	北海道	帯広青年会議所
	フィジー	公務員	12	日本国際協力センター	静岡	静岡県国際交流協会
	フィジー	公務員	12	日本国際協力センター	静岡	静岡県国際交流協会
8月28日 ～ 9月26日 8陣 90人	韓国	前職者(公務員)	25	日本ユースホステル協会	長崎	長崎県ユースホステル協会
	韓国	前職者(公務員)	24	勤労厚生協会	北海道	滝川国際交流協会
	韓国	教員(小学校)	23	世界青少年交流協会	茨城	茨城県外国青年招へい事業実行委員会
	韓国	学生(大学・専修校)	25	青年海外協力協会	熊本	熊本県青年海外協力協会
8月20日 ～ 9月18日 7陣 117人	韓国	教員(小学校)	23	世界青少年交流協会	茨城	茨城県外国青年招へい事業実行委員会
	韓国	学生(大学・専修校)	25	青年海外協力協会	熊本	熊本県青年海外協力協会
	バングラデシュ	保健医療	19	国際看護交流協会	山梨	国際看護交流協会
	バングラデシュ	保健医療	19	国際看護交流協会	山梨	国際看護交流協会
8月28日 ～ 9月26日 8陣 90人	ブータン、モルディブ	教育	10	青少年育成国民会議	鳥根	鳥根県国際交流青年友会
	インド	教育(専修校)	24	世界青少年交流協会	岐阜	岐阜県世界青年友の会
	ネパール	教育(専修校)	7	世界青少年交流協会	長野	駒ヶ根青年会議所
	スリ・ランカ	教育	10	日本ユネスコ協会連盟	佐賀	佐賀ユネスコ協会
8月28日 ～ 9月26日 8陣 90人	スリ・ランカ	教育	10	日本ユネスコ協会連盟	佐賀	佐賀ユネスコ協会
	パキスタン	公務員(併合)	20	日本国際協力センター	新潟	新潟県国際交流協会

受入時期 陣・人数	国名	分野	人数	実施協力団体	実施県	地方団体
9月10日 ～ 10月9日 9陣 114人	タイ	農業	25	青年海外協力協会	静岡	沼津国際交流協会
	タイ	経済A	20	日本ユースホステル協会	愛媛	愛媛県国際交流協会
	タイ	経済B	24	勤労厚生協会	愛知	ジャパンヤングサークル東海支部
	ブルネイ	社会開発	15	日本国際協力センター	北海道	千歳国際交流協会
	ミャンマー	教育	20	世界青少年交流協会	群馬	群馬県国際交流協会
	モンゴル	勤労青年	10	国際交流サービス協会	和歌山	和歌山県青少年育成協会
9月18日 ～ 10月17日 10陣 113人	マレーシア	農業開発	16	日本青年団協議会	岡山	岡山県青年館
	マレーシア	教育	25	日本国際生活体験協会	北海道	とまこまい国際交流センター
	マレーシア	科学技術開発	25	豊川市国際交流協会	愛知	豊川市国際交流協会
	インドネシア	農業	25	世界青少年交流協会	香川	香川県海外派遣友の会
	インドネシア	教育	22	青年海外協力協会	山形	山形県青年海外協力協会
10月8日 ～ 11月6日 11陣 100人	中国	青年指導者	25	日本ユースホステル協会	宮城	宮城県ユースホステル協会
	中国	経済青年	25	日本経済青年協議会	徳島	徳島県日中青年交流協会
	中国	公務員	25	ユースワーカー能力開発協会	岩手	岩手県国際交流協会
	中国	教員	25	国際交流サービス協会	栃木	栃木県青年会館
10月16日 ～ 11月14日 12陣 95人	アフリカ英語圏	女性教員1	26	大阪府国際交流財団	大阪	大阪府国際交流財団
	アフリカ仏語圏	女性教員2	20	青年海外協力協会	岡山	津山と世界を結ぶ会
	アフリカ英語圏	経済公務員1	23	青少年育成国民会議	愛媛	愛媛県青年海外協力協会
	アフリカ仏語圏	経済公務員2	26	世界青少年交流協会	山口	世界青年徳山友の会
10月22日 ～ 11月20日 13陣 89人	ASEAN混成	教育1	18	愛知県国際交流協会	愛知	愛知県国際交流協会
	ASEAN混成	教育2	18	日本国際生活体験協会	北海道	札幌国際プラザ
	ASEAN混成	経済1	18	国際交流サービス協会	千葉	千葉県国際交流協会
	ASEAN混成	経済2	18	青少年育成国民会議	福岡	九州・山口経済連合会
	ASEAN混成	経済3	17	勤労厚生協会	岡山	岡山青年国際交流会
11月5日 ～ 12月4日 14陣 113人	ASEAN混成	環境保全	30	日本経済青年協議会	北海道	釧路市海外青年招へい事業実行委員会
	ASEAN混成	社会福祉	30	日本ユースホステル協会	広島	広島県青少年文化センター
	ASEAN混成	保健医療	29	国際看護交流協会	長野	長野県国際看護交流協会
	ASEAN混成	行政A	24	公務研修協議会	福岡	福岡県海外青年招へい事業実行委員会
11月19日 ～ 12月18日 15陣 100人	中国	産業基盤整備	25	世界青少年交流協会	兵庫	兵庫県青少年本部
	中国	経済開発	25	勤労厚生協会	鳥取	とっとり青友会
	中国	地域振興	25	青年海外協力協会	北海道	十勝インターナショナル協会
	中国	人材育成	25	ユースワーカー能力開発協会	沖縄	沖縄県青少年育成県民会議
1月21日 ～ 2月19日 16陣 50人	中南米混成	社会福祉1	25	青少年育成国民会議	沖縄	沖縄県国際交流財団
	中南米混成	社会福祉2	25	日本国際協力センター	沖縄	沖縄県国際交流財団
合計	72グループ 1,593名	ASEAN6カ国 (79) ミャンマー (20) 太平洋14カ国・地域 (88) 中国 (200) 韓国 (97) 南西アジア7カ国 (90) モンゴル (10) アフリカ39カ国・1国際機関 (95) インドシナ3カ国 (149) 中南米11カ国 (50) 計84カ国・地域、1国際機関				

(3) 青年招へい事業 国別年度別受け入れ実績

国名	年度															合計
	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9		
インドネシア	149	150	150	150	150	149	150	149	147	149	145	150	149	150	2,087	
マレーシア	147	148	150	150	150	150	150	150	150	150	150	149	150	150	2,094	
フィリピン	149	150	150	150	150	150	149	147	148	149	150	149	150	148	2,089	
シンガポール	149	150	150	150	150	150	150	147	149	149	147	146	149	148	2,084	
タイ	149	150	150	150	150	150	150	150	149	147	150	150	150	150	2,095	
ブルネイ	5	30	49	50	50	49	50	43	50	48	49	48	49	48	618	
ASEAN諸国小計	748	778	799	800	800	798	799	786	793	792	791	792	797	794	11,067	
モンゴル	—	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	10	10	60	
ミャンマー	—	—	10	10	0	0	0	0	0	0	20	20	20	20	100	
インド	—	—	—	—	—	—	—	30	29	30	13	23	27	24	176	
バングラデシュ	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	20	19	139	
パキスタン	—	—	—	—	—	—	—	20	20	20	20	20	20	20	140	
ネパール	—	—	—	—	—	—	—	10	9	10	10	10	10	7	66	
ブータン	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	5	5	35	
スリ・ランカ	—	—	—	—	—	—	—	10	10	10	10	10	10	10	70	
モルディヴ	—	—	—	—	—	—	—	5	5	5	5	5	5	5	35	
南西アジア諸国小計	—	—	—	—	—	—	—	100	98	100	83	93	97	90	661	
アフリカ諸国	—	—	—	—	—	—	—	—	—	50	100	97	95	95	437	
フィジー	—	—	10	10	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	139	
バブア・ニューギニア	—	—	10	14	30	34	30	30	30	30	30	30	30	29	327	
その他太平洋諸国・地域	—	—	—	—	45	38	36	32	36	34	38	36	47	47	389	
太平洋諸国・地域小計	—	—	20	24	86	84	78	74	78	76	80	78	89	88	855	
ヴェトナム	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	98	99	99	296	
カンボディア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	30	30	90	
ラオス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	18	20	58	
インドシナ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	148	147	149	444	
メキシコ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	11	
ブラジル	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	15	
ペルー	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	11	
チリ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	6	
その他中南米諸国	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	7	
中南米諸国計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	50	50	
合計	748	778	829	834	886	882	877	960	979	1,028	1,084	1,238	1,255	1,296	13,674	

分野別プログラム実施都道府県



2. 招へい青年の印象

■アジア

■ブルネイ

日本発見

ハジ・ダヤン・ビン・ハジ・カシム
(社会開発グループ)

日本を発見することは、生活様式、文化、伝統、そして技術の進歩をよく知るということだ。この1カ月の青年招へい事業は、私たちにとって日本の価値を垣間見るには十分過ぎるものだった。このプログラムは、日本の生活様式と日本人を見ることを可能にしてくれた。

まず、このプログラムの進行をスムーズにしてくださったコーディネーターにお礼を申し上げたいと思う。どのプログラムもそれぞれ有意義で、私たち全員が日本滞在を本当に楽しんだ。

私たちの間で最も心に残るプログラムは実際に日本の家族と知り合い、その生活を体験することのできたホームステイだった。同時に、日本文化がどのように保たれ、新しい世代に引き継がれているのかも学んだ。

また、日本人青年と出会い、彼らとの意見交換や様々な体験をするチャンスがあった合宿セミナーも有意義なプログラムだった。このプログラム中、教育制度、社会開発、そして多くのことについての相違を発見した。

講義では、何が自国に应用できるかについていつでも選別、評価することができるように配慮されていた。

視察見学旅行は、私たちが遠く及ぼず、あるいは追いつくこともできないほどの日本の技術的進歩に

触れられたことを喜んで記したい。特にNTTの訪問は、私たちの心とビジョンを開き、まだまだ学ぶべきことがあることを改めて知った。

概して、用意されたすべてのプログラムは私たちにとっても、日本人青年にとっても素晴らしく、そして有意義であったことと思う。このプログラムを通して友情の新しい架け橋を築くことができた。そしてそれは永遠に続くだろう。

マッサラーム

いろいろありがとうございました。

メイド イン ジャパン

ヒビバ・シオン
(ASEAN混成教育1グループ)

日本で私たちは様々な経験をし、それぞれの経験を様々に感じた。

日本での教育は、戦後、国の前進と発展に向けて、急速に向上してきたと言われている。私たちは、現在の日本の教育モットーが、心身共にバランスのとれた若者を育てていくことであると学び、加えて、日本人はたいへん秩序正しく、親しみやすい人たちであることを感じることもできた。

日本は、国際化を積極的に推し進めている国であると聞いていたが、実際のところは、英語を話せる人は少なく、町でコミュニケーションを図る時には苦勞した。

「生け花」と呼ばれる色鮮やかな花の装飾、定められた礼儀作法によって行う「茶道」は、日出づる国、日本でしか作り出すことのできない芸術である。

世界でも知られている電気製品の数々から、あの有名な新幹線まで、日本は様々なものを生み出してきた。また、日本はあちこちに、複雑な地下鉄網などの交通組織を作り上げてきた。その交通機関は、

時間に正確であり、安全性や快適性にも優れたものである。

「おいしいです」という一言は、素材の味を最大限活かした、ユニークな日本食をいただいた後には、ぴったりな言葉である。

最後に、日本で得た私たちの経験は、「すごい」という言葉でしめくることができる。

がとう。

あなたたちのことは忘れません、また会いましょう。

日本の印象

マズラン・ビン・ハジ・ヤーヤ
(ASEAN混成 社会福祉グループ)

JICAの青年招へいプログラムで、11月5日から12月4日まで日本に滞在した。その1カ月間、文化や伝統、発達した科学技術等、いろいろ学ぶことができた。

受付業務をしているスタッフの愛想の良さには驚いた。常にニコニコして「いらっしゃいませ」と客を迎える。ほとんど毎日、一日中レストランやショッピング・センターで同じように働いているなんて、大変だと思う。

日本人がとてもきれい好きだということも分かった。日本人自身がきれいできちんとした服装をしているだけではなく、街や高速道路、地下鉄、新幹線も清潔だった。池袋、広島、京都、奈良、大阪にもゴミはひとつも落ちていなかった。多くの施設を見学して、進んだ技術を実際に見ることができた。

広島では深い感動を覚えた。ずっと広島には行きたいと思っていた。映画を見て、資料館や原爆ドーム、広島平和記念公園を訪れた。そこでは涙が止まらなかった。この出来事から人々が教訓を学び、二度と戦争が起こらないように、と願わずにはいられなかった。

30日間の日本滞在経験で言いたいことはたくさんある。言葉だけでは気持ちを表現するのに不十分だが、言葉を借りるしかないのだ。

文化の交流や人々の友情・相互理解を深めるため、このプログラムが続いていくことを願っている。

出会ったすべての人々、社会福祉グループのメンバー、コーディネーターの治さん、みゆきさん、マミーさん、平凡な言葉ではあるけれども、どうもありがとうございます。そしてASEANの仲間たち、思い出をあり

■アジア

■インドネシア

友への手紙

ニナ・フィフィ・オクタフィア
(社会開発グループ)

「ねえ、『よく知らなければ、愛せない』、この言葉を知っているよね。よく耳にするこの言葉は、知り合ったばかりの人と親しくなりたいという気持ちをこめた言葉だよね。これは、『アジアの虎』と呼ばれる日本を知るために1カ月間の青年招へい事業に参加し、日本各地への訪問、若い世代との交流、ホームステイを通して日本の生活を垣間見ることができた私たちにぴったりの言葉だと思うの」

私たちが日本に着いたばかりの頃は、やはり違和感を感じた。マレイ文化とほとんど接点のない日本の社会や習慣に合わせようと一生懸命努力した。だから、先入観と現実のギャップによって起こる疑問がたくさんあったり、いろいろ失敗しても、それは当たり前である。

うれしいことにこの努力は報われた。日本の若者たちと冗談を言い合ったり、ディスカッションしたり、歌ったり踊ったり、一緒にお風呂にまで入ってしまった。それに、いろいろな所へ行ったり、見学もできた。新しい出来事に出会うことによって視野が広がり、またホームステイでお互いの文化を紹介し合ったり、雑誌に花が咲いた。本当に楽しかった。

日本での日々がこんなに早く過ぎてしまうなんて誰も思ってなくて、でも最後の日が来てしまった。感動の頂点は歓送会。私たちは本当はこの1カ月が決して短い期間ではなかったのだ、ということを考えなければならぬと思う。私たちが日本で得たものはたくさんあった。視野が広がり新しい理念や考え方を得たことで、これからの私たちの生き方が変わってくると思う。私たちがインドネシアに持ち帰るものは、お土産だけでなく、このかけがえのないチャンスによってできあがった神や国に対する責任感ではないかと思う。

もちろんこれは生き方の問題。私たちがどんな生き方をするかどんな人生を選ぶかにかかっている。これは、私たちそれぞれによって自然に決定される

と信じたい。誰がどんなふう生きるかはいずれ分かることだから。

自分の生き方は自分で選べる。どこへでも歩いていける。だから、この体験を活かして自分に与えられた道をどのように生きていくか、お互いに見守っていききたい。

前進への第一歩

アディス・ヌル・ラフミ・プリマ・デウィ
(経済Aグループ)

この青年招へい事業に参加できたことは、神に感謝すべきまったく幸運なことだった。私にとってこのプログラムは、将来の私の人生の前進のための第一歩だ。それで、私はこの良い機会を無駄にはしたくないと思っている。また、このプログラムは、未来をより確かに迎えるための勇気と意欲を与えるという意味でも、ここに記しておくべきであると考え

る。このプログラムに参加して、多くの知識・見解を得ることができ、また自分自身の資質の向上を図ることができた。数百年昔から現在に至るまで、日本人が培ってきた非常に高い価値を持った文化を目にすることができたことをとても誇りに感じ、それらに敬意を表する。

またホームステイすることによって日本人の日常生活を理解するという体験は、とても興味深いものだった。そのほかの印象深い体験は、日本人の友人たちとの間に培われた友好関係だ。これからもずっと続いていくことを願っている。また、ホームステイ先のお父さん、お母さん、そして弟や妹たちとの間に育まれた真摯な友愛の情も、これから先も途切れることなく続いていくことを祈っている。ホームステイ先では、家族同様に受け入れていただき、2日間というのは短過ぎて、まるで一瞬のように感じた。彼らとは別れたくないという気持ちになり、それは今まで私の人生の一番大切な一部分となっている。

このような事情は私にとっては非常に忘れがたく、このプログラムが早く終わってほしくないと思った。しかし、始まりのあるものは必ず終わりがある。残念ながら、このプログラムは二度参加することはで

きない。このプログラムが参加者全員にとって有意義なものであることを祈る。

最後の感想として、日本の参加青年やフィリピンの参加青年、忍耐強く親切なコーディネーターたち、またインドネシアからの参加青年、そして私のホストファミリー、すべての方々と出会えたことほとてもうれしいことだった。きっと、このすべての人たちは私はいつまでも懐かしく思い出すことだろう。

案ずるより産むが易し

ポピィ・カルリナ
(経済Bグループ)

ホストファミリーが私を迎えにきた時と、ホームステイが終わって帰ってきた時の気持ちは今でも鮮明によみがえってくる。1997年5月30日の朝がきた。心臓の鼓動が高鳴る。そう、今日はホストファミリーが迎えにくる日だ。私もグループの仲間たちも皆がこの日のことを考えてはいろいろ思いを巡らせていた。皆自分の日本語が決してうまくないということでは分かっていたし、ホストファミリーの中には初めてこのプログラムに参加する家族や、英語が話せない家族もあるという話を耳にしていたからだ。

いよいよホストファミリーとの対面式が終わった。さて、これから私は習慣の全く異なる新しい生活へと入っていくのだ。私を受け入れてくれた家族ほとても親切そうだったが、英語を話せる人がいないこと、インドネシアのことをあまり知らないこと、初めてホームステイを受け入れる家庭である、ということが私にとっては少し不安だった。しかし、私は黙っていることのできない性格なので、ほとんど日本語ができないにもかかわらずインドネシアについていろいろな話をしてみた。

1日目の夕食後、初めて家族全員が集まった。私の祖国の家族の写真や、インドネシアの観光地の絵ハガキを家族の人たちに見せながら話をした。つたない私の日本語に、家族皆が耳を傾け真剣に聞き入っている様子であった。この時、うれしかったのは、家族の人たちが聞き役に回るだけでなく、写真を見ながらいろいろ質問をしてくれたことだった。思いもよらない質問に戸惑いながらも、唯一の手段として魔法のアンチョコ『にほんご21』をめくって必死

の対応をした。結果としてこの会話集を積極的に聞くことで、彼らとのコミュニケーションが途切れることはなかった。もちろん流暢にはいかなないけれど、ホームステイ期間中は一緒に買い物をしたり地元観光をして過ごした。親戚が集まって一緒に食事をした日の夜は、花火パーティーとなり賑やかに夜中まで遊んだ。

そして、ついにお別れの日がきた。家族の皆に送られて戻ってきた時、私は涙をこらえられなかった。感謝の気持ちでいっぱいだった。ホームステイの前に考えていたことは、終わってみれば心配するに及ばないことばかりであった。インドネシアの格言に「案ずるより産むが易し(甘いと思われているものが甘いとは限らず、また苦いと思われているものが苦いとは限らず)」というのがある。まさにそのとおりだと思う。

このホームステイを通じ、異なった文化、異なった言語、異なった信仰などの様々な違いは、私たちが人間としてお互いに慈しみ合い、いたわり合い、尊重し合ううえで必ずしも障害にはならないということに気づいた。

忘れられないホームステイ

エフィ・アングラエニ・バルリアンティ
(農業グループ)

プログラムのひとつであるホームステイは、私にとって忘れがたい思い出として心に残った。受け入れ家庭の方々との意思の疎通を図ることができるのだろうか、家庭環境に慣れるのにどうしようかと不安でいっぱいだったが、そんな緊張した心も受け入れ家庭を実際に訪れてからは、しだいにやわらいだ。

まず、居間に貼ってある「Selamat datang(歓迎)」の表示に目を奪われた。皆さんの細やかな心遣いに心からありがたいと感じた。私を家族の一員として接して下さった。食事制限と味付けにも気を遣って、料理を口にするたびに「これは口に合いますか」と尋ねられた。

受け入れ家庭は比較的気温の低い山岳地帯に住んでいる。牧草がよく育ち牛の飼料用の干し草生産にも適した場所だ。

彼らはそこで酪農を営んでいる。私は大学で畜産

学を専攻しているが、ホームステイ中にお父さんから牛の飼育について多くのことを学んだ。これからの学習と研究のために参考になると思う。繁殖手法から搾乳に至るまで指導して下さった。機械化が進んでいるので疲労を伴う作業はない。インドネシアではまだ大半の仕事を手作業でやらなければならない。朝夕、牛に飼料を与える作業も手伝った。搾乳機の取り扱い方法や乳製品の流通についてを学んだが、比較材料として活かそうと思う。

インドネシア料理を作って皆さんに召し上がっていただいたが、おおむね好評だったのでうれしかった。

そして、散策にも誘われ家族と一緒に外出して楽しいひとときを過ごしたが、人間はどこでも皆同じなんだなあと思ひしみて感じた。

忘れられない思い出づくりができた。またいつか機会があったら再び日本を訪れようと思う。

忘れられないホームステイの日々

ルトウフィ・ファウジ・マスカティ
(教育グループ)

このプログラムの中で、私にとって最も楽しかったのはホームステイだ。私はホームステイで、山形県の朝日町に住む幸せな家族の一員となることになった。

ホームステイ初日、お母さんに誘われてボランティアに参加した。毎週土曜日、地域の人たちが続けている活動らしい。私はお母さんの仲間たちに紹介してもらった。

2日目、私はお父さんとお母さんに連れられて観光に出かけた。一日中歩き回ったので、家に帰るとクタクタだった。お母さんに寝よう言われ、その日は早めに寝ることにした。

翌朝、ホームステイ最終日の朝だ。「オハヨウゴザイマス、Uzi」と何度もお母さんに起こされたが、私はなかなか起きることができなかった。そして、目が覚めた時にはすでに7時15分をまわっていて、お父さんもお母さんもすっかり準備の整った食卓の前で私を待っていた。寝坊してゴメンナサイとあやまると、2人は「ダイジョウブデス、Uzi」と言ってくれた。この言葉は私の心の中にいつまでも残った。

思い出の札幌から

ナシルディン・ムナウィール
(ASEAN混成 教育2グループ)

待ち望んでいた時
 ルーシス札幌ホテルの窓をたたく風
 ほかになんと言ったらいいのだろう
 ただ札幌の美しさに包まれるだけ
 雪が舞い降りるのを待っていた
 しかし、別れの時が来ても雪は降らなかった
 故郷を遠く離れて
 空の見えない奇妙な国で
 着物姿の女性が絹の傘をさしかける
 沈黙に、疑いに、幾千の時を超えた夢に、
 興味、驚き、感銘、あるいは退屈
 夜が明けるとまで私たちがともにいた
 たとえ雪が降らなくとも
 幾多の思いが心をよぎる
 故郷を遠く離れたこの美しい国で
 仲間たちよ
 心を開いて語り合おう
 兄弟のような友となれたのだから
 私たちがともにいたことは忘れない
 明日が来なくとも思い出は残る
 私たちは真の友となったのだから
 つらい時は助け合おう
 困難の時は信じ合おう
 明日のために

なんて素晴らしい日本!

ムハマッド・イクバル・モクタール
(ASEAN混成 保健医療グループ)

初めに、日本についての感想を述べる機会をいただいたことに感謝したい。訪問する前は、日本に関して浅い単純な見解しか持ち合わせていなかった。日本は、毎日熱心に仕事に励み、文化に固執し、他人に無関心な人々のいる小国という印象であった。実際は、日本は世界の第一人者として認められた大国である。最も重要な点は、日本人の規律正しき、勤勉さ、誇りの高さなどが、日本を成功に導いたと

いうことである。日本人が毎日熱心に仕事をする姿勢は、私にとって脅威に感じる。毎日10時間あまりを冗談を言うこともなく、飽きたり疲れたりすることなく、まじめに持続的に仕事をする。このようなことが、仕事に精通したある分野での専門家を作り出しているのである。

東京ディズニーランドでは規律正しさに感銘した。私たちはある劇場に入場しようとしていたが、長蛇の列でおよそ4時間もの間並び続けていなければならなかった。その長い列はロープで仕切られていただけであったが、誰も列を乱すことなくおとなしく並び続けていた。このような姿勢が、日本が洗練された施設を生み出し、素晴らしいサービスを提供し、その開発を成功に導いた要因であろう。しかし、文化という側面では、残念ながら様々な文化の流入の過程の中で、独自の文化が曖昧にもなっている。日本人はその生活様式、髪型、衣服、出版物、テレビ番組などをみても、特に先進工業国のものを取り入れる傾向にある。

さらに、日本は第2次世界大戦の原爆による崩壊から本当に貴重な経験を得た。戦争は破壊や崩壊の象徴として人々の心に残っている。今、日本は、財政的援助や専門家の派遣、友好プログラムなどの社会的活動を通じてその力を世界平和や統一のために発揮しようとしている。日本人は、世界中の戦争や崩壊がなくなるように「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ」と言い続けてきた。次は日本が世界で最も重要な役割を担うことができると信じてやまない。

■アジア

■マレーシア

日本人の印象

ノール・アズマン・ビン・アリ
(経済経営グループ)

日本人は知人同士の間では、たいへん礼儀正しく親切であるということ、今回のプログラムを通して体験した。参加青年への特別なもてなしに非常に感銘を受けたし、その精神は見習うべきものがある。他者を尊敬し称賛する態度が、事業の成功の一因となっている。交流プログラムの質疑応答では、日本人の本音はあまり出なかった。参加者が客観的な観察眼を持っていないと、正しい結論に到らないおそれがある。

日本の社会は時間の効率的利用に重点をおいていた。経験の積み重ねから得られた最善の方法である、時間厳守の精神がプログラム全体から窺えた。言葉が交流の障害になることがあるが、プログラムの運営が素晴らしく、問題との取り組みが良ければ、成果に悪影響を及ぼすことはない。

東京での昼夜を問わない人の動きから、日本の発展の陰の部分垣間見た。この教訓から、物質主義の隆盛が道徳観や精神の向上につながるよう、一層の注意を払う必要があるということ学んだ。また、福島県の経済発展部門での環境保全の原則も、発展の弊害を克服するという意味では同様であろう。

様々な背景をもつ青年の期待を満たすプログラムを作る方々の苦勞を察する次第である。

ホームステイ

シャンムガム・a/l・チアガラジャン
(中小企業グループ)

ホームステイの経験は、私にとって忘れがたい日々となった。私のホストファミリーはたいへん裕福であったけれども、私を受け入れてくださった彼らの姿勢は、称賛されるべきものであった。私の日本の父・母である舟喜進さんと奥様は、ともに60歳を過ぎていらっしゃるが、とてもアクティブである。

ホームステイ2日目、私は彼らの家の近くの小川

で開かれた、「ホテル鑑賞会」に参加する機会を得た。子供たちを中心に、たくさんの日本人がこの祭りを楽しむために集まって来た。私はそこで、一人の日本人青年と話をすることができた。両者の言葉の違いから、私たちの会話は流暢なコミュニケーションとはならなかったが、それは、お互いの交流のために障害になるものでは決してなかった。私たちは、20分ほどの会話のあとに別れた。

2日後、ホストファミリーが、日本語で書かれた1枚の(コピーされた)紙を持って、私に会いに来てくれた。そしてそれが、金沢市民の90パーセントを購読者に持つという新聞に掲載された、私の名前をも記された「ホテル鑑賞会」についての記事だと知らされた時は、何とうれしかったことか。私は32年間の人生の中で、初めて自分の名前が新聞に掲載されるという幸運に恵まれたのだ。そして私にとってより意義深いのは、それが外国の新聞であったということである。これが、私の人生における歴史的かつ、最も甘美な経験となった。

私のホストファミリーの皆様、そしてJICAに対する感謝の念は尽きない。

忘れられない思い出

カマル・ビン・バルディ
(農業開発グループ)

1997年9月18日、時計は午前4時30分を示していたが、参加者はそれぞれが既に目覚めていた。全員が初めて訪問する「日出づる国」を見るために落ち着かない。1日目の午後、散歩の機会を得たが、あまり人が行き交っていないのに驚きを感じた。しかし地下鉄に乗って初めてその答えを得ることができた。

体験的日本語学習は「鶏とあひるの会話」と言われる、ちくはぐな会話のファーストエピソードを綴り始めた。英語が話せる日本人参加者と一緒の場合は会話も賑やかだ。同グループに英語が堪能でない仲間がいた場合は、ボランティアの通訳者になる者もいた。日本人青年と一緒に合宿セミナーは待ち遠しかった。富士山が注目の的となったがあいにく、富士山は見えなかった。が、どうしても富士山を見たいという強い思いが通じたのか、翌日、恥ずかし

がり屋と言われていた富士山が姿を現してくれた。セバククロウが披露され、日本人参加者も頭にコブができて足が痛くなるまでやり、土達ぶりが見られた。エンダンとボーリアの踊りも注目の的となった。

富村という言葉は私たち全員をドキドキさせた。それぞれが、きっと「鶏とあひるの会話」のセカンドエピソードの出現になるだろうと感じ始め、そしてそれは事実となった。飛行機について尋ねられたのに、水田の雀が答えになっていた。大切なのは、辞書や日本語の本が常に携帯されていたとは言え、2つの人種間でコミュニケーションすることができたということである。魚釣りや田畑へ出かけたことの思い出は忘れられない。別れの時はたいへん悲しく、涙が雫になってポタポタ落ちた。その後の葡萄狩りと芋掘りの経験が悲しい出来事を少しのあいだ忘れさせてくれたが、それはきつといつまでも忘れられないことである。

歴史的な各地への訪問はその激しさを置きざりにしてはいなかった。広島で涙がさらに流れ落ちたのは、たぶん第2次世界大戦時の原爆のひどさが感じられたからだ。被ばくした3人のマレーシア人に対しての尊敬の念を強く感じた。

日本——私たちはまたいつの日か、この地に帰ってきたいと願う。

日本人という民族—1カ月で私たちが知った側面

シティ・サルビアール・ビンティ・ハジラドゥアン
(教育グループ)

この1カ月で私たちが首をかしげてしまったのは、上野公園を訪れた時のことだ。葉が生い茂った木々の下にたくさんのテントがあった。私たちはキャンプ場だと思った。しかしそれは家を持たない人々の段ボールらしかった。豊かな国として知られる日本で家を持たない人々がこんなにいる、公園に住む道を選択しているという事実には、やはり驚きを隠しきれない。どうやって彼らは四季を過ごすのであろうか。

夜の公園で日本人の若い男女を見た時は気絶しそうであった。男の子は半分裸だし、女の子は恥じらいもなく服を一枚一枚脱いでいく。モラル崩壊の象徴である。彼らは誇り高いアジア人であるというこ

とを忘れていたのか。それとも、もしかして彼らには宗教心というものがなくなってしまったのか。答えを出せるのは彼らだけである。

ある民族の心を知るのに1カ月という期間は十分とはいえない。しかしながら、私たちが知ったのは、日本人とは「極端に」ユニークな民族であるという事実だ。一般的に、彼らはすべてにおいて、やりすぎである。規律、清潔さ、喜びや悲しみ、ファッション、テクノロジーと改革、読書、娯楽、勤勉さと厳密さ。

やりすぎは良くないという意味ではなく、何事にも熱くなってしまうがちということだ。私たちは世界の10以上の民族と会ったが、これが初めてであった。これほどに、すべてにおいて繊細で大変誠実な民族に出会ったのは、だから、彼らが戦後ほんの数十年でアメリカ合衆国やヨーロッパ諸国を打ち負かしたのも別に驚くにはあたらないのである。

世界から見た日本

シャホロム・ビン・バカル
(科学技術開発グループ)

イスカルダルシャ氏をリーダーに、25人の科学技術開発グループは他の11人の参加者ととも、9月18日成田空港に着いた。参加者全員が東京の秩序正しさと清潔さに驚きの気持ちを表した。

計画的な開発と効果的な輸送システムを見るかぎり、あらゆる分野で、日本は世界の国に見られる混雑もなく、急速に発展をした国といえる。

レインボーシティーは日本の最新技術の素晴らしさを物語っている。

そのほかに、独特の価値を有する歴史的場所への訪問は、国の文化を無視することなく、発展を追い求める必要があるということを教えてくれた。

ホームステイプログラムや日本人との交流は意義深いものだった。団結の精神を形づくるほかに、技術分野の開発を追求したり、次世代の幸運を重要視する精神を刺激するのに十分であった。

発展は山のように高い憧れのみでは到達することはできない。それは熱意とともに国を愛する精神が求められる。

日本はそれを説明しているし、他の国はその点を

指針にする必要がある。

どのような分野においても、日本はずっと進歩している。

マレーシア国民として、日本訪問は、来る2020年マレーシアが先進国となるために必要とされる、エネルギーや考えを生み出す見方や気持ちを変化させることのできるものであると思った。

コンビネーション、技術、教養、高い精神は成功と発展への近道である。

日本の印象

モハメド・ラシド・ビン・カンチル
(ASEAN混成経済1グループ)

日本を訪れる前の私の日本の印象は、間接的に見聞きしたり、マレーシアにいる多くの日本人から直接に得たものだった。私は、日本人は他の国の人々に比べて勤勉で、時間を厳守し、高い労働倫理と豊かな伝統文化をもっている人々だと思っていた。

日本での1カ月の滞在により、私が抱いていたこのような印象はある意味で強まった。素晴らしいインフラストラクチャーと官・民の密接な関係が、世界経済における日本を成功に導いた大きな要因だ。また人口の多さと人々の集中力が、国際スポーツの分野でも成功をもたらした。総合的な計画性と充実したスポーツ施設に裏付けられた強さが、才能のある新人の発掘を容易にしたのだ。

しかし、施設訪問や地方の人々との議論を通じて、現在の日本が様々な問題に直面していることも分かった。私の考えではこのような問題は、日本が物質を追求する国となり、そのため道徳が荒廃し家族の構造が不安定になったことから派生したものだ。自由がありすぎるのにマイナス要因をなくすための法的規制がないことの結果なのだと思う。

ホームステイ体験

モハマッド・ビン・メンテック
 アブドゥル・ガーニ・ビン・ガザリー
 アブドゥル・ラヒム・ビン・イシャック
 アスリ・ビン・アブドゥル・ラーマン
 (ASEAN混成 行政Aグループ)

【期待】

マレーシアでは、来日前に古い日本の生活様式について教えられた。私たちは郊外や村落部に住むホストファミリーと生活することで、直接それを体験することを期待していた。しかし、私たちの期待とは異なり、実際は私たちのほとんどが日本の近代化された家族生活様式の中に滞在することになった。

【第一印象】

ほとんどのホストファミリーが都市部に住んでいたため、私たちは古い日本の価値観の中で生活し、それを実行している家族の姿を見ることができなかった。私たちは日本の家族は東洋的価値観を捨て始め、その生活様式、家族そして社会に西洋的価値観を導入しつつあるのだろうかといふかしんだ。

【体験】

家族に温かく迎えられ、家族の皆がささやかなパーティーを開いてくれたことは思わぬ驚きだった。鍋料理のような客をもてなす特別な夕食は大変「オイシイデスネ」だった。2日間のプログラムは盛りだくさんで、家族は私たちを美しく歴史的な場所に連れていってくれた。とても興味深く、心躍る経験だった。夜には、よく知られたマレーシア料理を作るために私たちは台所で奮闘することになった。一家族はその辛さをおそれつつも味を気に入ってくれた。

日本の「オフロ」に入ったことや日本の布団で眠ったこともわくわくする体験だった。「ウノ」という日本のカードゲームで遊んだこと、考えや意見を交換しての、互いの文化を共有したことも楽しい一時だった。ホストファミリーとの写真撮影も忘れがたい思い出だ。感謝を込めたおみやげ交換もまたわかり。ホストファミリーとの2日間はあまりにも短く、少し疲れたとはいえ、楽しみと興奮、そして美しい

思い出に満ち溢れていた。

【結論】

時は過ぎ去り、そのあとにはホストファミリーと楽しく過ごした美しい思い出だけが残る。それは終焉ではなく、ただ日本の家族と私たちとの新たな関係の始まりにすぎない。私たちはその思い出を祖国に持ち帰って、家族、友人、そして同僚と分かち合い、長く思い出に残る経験としたいと思う。

■アジア

■フィリピン

間近に見た日本

ロレンゾ・ドミンゲス・パラン・サード
(教育グループ)

私の日本での滞在は、明らかに、この青年招へい事業の企画意図どおりの展開だった。それは人と人との絆を結ぶことによりフィリピンと日本を繋いだのだ。なぜならば、それがフィリピンであれ日本であれ、私の中に皆さんとの再会を心持ちにする気持ちが生まれている。これは他のフィリピン青年も同じだと確信している。その再会がフィリピンであることを私は願っている。そうすれば、この数週間に私が受けたおもてなしと親切のお返しができるからだ。

私は敢えて言いたい、日本の最も素晴らしいところは、富士山でもなければ東京タワーでもなく、ましてや地方の美しい湖や山々でもない。温かい心を持った愛すべき人々なのだ。それこそが私が日本に来る前には知らなかった日本の特徴だ。私が持っていた日本人の印象は真面目な顔のビジネスマン、りっぱな体躯の相撲力士、そして情緒的な風情の着物姿の女性だった。しかし、今ではこれらのイメージはほかのイメージに混ざってしまった。笑顔の日本青年、ビジネススーツ姿の日本女性、そして朗らかに笑う元気なバスガイドさんもそれに含まれる。そして今、私は日本を以前よりよく知っているという自信を持って言うことができる。日本人は素晴らしい友達になり得ること、彼らとの友情を私は永遠に大切にしていこうと信じている。

理解と友好を通じて両国に架ける橋

マデリン・シルビア・フランシスコ
(社会開発グループ)

旅を通じて学ぶことは多いという。旅はその国で起きていることを実際に自分の目で確認し、その歴史を形づくる過程に参加する機会を与えてくれる。またその国がいかにして今日の姿に至ったかを理解するための最良の方法でもある。青年招へい事業は、

まさにこれらの貴重な機会を私たちに提供してくれた。

日本では、古いものと新しいものが見事に調和している。先端技術のリーダー的存在で、コンピューターやエレクトロニクス狂にはこたえられない国でもある。秋葉原や新宿は特におもしろい。最新型の自動車やハイテク機器は、どこに行っても目にすることができる。交通や通信機関の発達のおかげで、都市部も農村部も生活水準はほとんど変わらない。

ハイテク機器や最新技術がもたらす快適な生活を享受する一方で、日本人は豊かでユニークな文化遺産の保存・伝承にも成功してきた。古いお城や寺院が、高層ビルや近代建築に囲まれながら、誇らしげにその姿をとどめている。駅では、背広や最新モードの服をまとった人々や、カラフルに髪を染めた若者に交じって和服の女性の姿を見ることができる。国際的に確固たる地位を築いた今もなお、日本では日本語が根強く使われている。あいさつや敬意を表す手段としてのお辞儀という習慣も、若い世代に受け継がれている。地方では、水田や山々のおりなす景色が美しく、その周辺にはパチンコ店や商店も見受けられる。仕事に対する忠誠心や労働倫理、共通の利益を重視するチームワークなど、日本の急速な経済成長に貢献した諸条件は、今も健在だ。また日本は経済大国としての地位を維持するための努力も怠らないが、持続的成長のための環境保全にも余念がない。さらには核兵器の廃絶を強く訴えることで、世界平和にも貢献している。

この青年招へい事業は私たちに、多くを学ぶ機会のみならず、わがフィリピン国民を改めて振り返り、反省する機会をも与えてくれた。祖国フィリピンに日本のような発展を望むなら、まだまだ道は遠いと言わざるを得ない。私たちが1カ月に及ぶ日本滞在中で経験し学んだことは、フィリピンが21世紀までに新興工業国の仲間入りをめざすうえで、大いに役立つはずである。

日本を発つ日が近づくにつれ、私たちは複雑な思いにかられている。もちろん家族や旧友との再会がうれしいが、ようやく慣れ親しんだ日本独特のものとの別れも名残惜しい。緑茶、箸、熱いお風呂、ユカタ。よく使った「スイマセーン」「ハイ、ドーゾ」「トイレハ ドコデスカ」などの日本語の表現、おいしい日本料理。

何よりもつらいのは、今や第二の故郷となった日本や新しい友人との別れだ。プログラム関係者、コーディネーター、受入家庭の皆さん、プログラムを通じて出会った若者たち、そして行動を共にしてきたフィリピンからの参加者たち。

「さよなら、日本」

私たちはたくさんさんの楽しい思い出を胸に帰途に就く。日本の方々が、私たちからも多くを学んでくださったことを感謝し、今後も両国の間に実りある関係が続くことを祈りながら。

日本—文化と経済のユニークな融合

ホセ・ヴィ・カマチョ・ジュニア
(経済Aグループ)

友情が真のものであり、長続きするものであるためには、かなり深く根を下ろしたものでなくてはならない。人々の言動や、社会経済状態、文化、信条、価値、慣習、イデオロギー等の顕著な多様性や違いにも左右されることのない、お互いの信頼と連帯に基盤を置くものでなくてはならない。ただし、人の心に友情を深く刻み込むには、人々のものがきや勝利の歓喜の声を聞き、信条やライフスタイルを理解して、他の人たちがどのように交流し、触れ合うのかをよく知らなくてはいけない。正にお互いに信頼と理解が、青年招へい事業の本質であろう。

豊かで独自の文化…

騒がしく忙しい大都市…

控えめだが魅力のある日本人…

歴史に刻まれたドラマチックで暗い過去から、日本は先進国として経済大国として立ち上がり、経済的な繁栄のための希望と新鮮な活力の象徴となっている。恐ろしい戦争も対立も、日本人が国を再建するのに妨げとはならなかった。

実際、日本の近代化の過程はユニークである。實用主義、同質性、勤勉が強調されている。近代化に必要なのは日本人の規律、犠牲、信念、そして、進歩と工業化を得るため一丸となった集団の意志である。天然資源は限られているが、豊富な人的資源によって日本は発展を可能にした。日本人一人ひとりが、発展により生活レベルの向上の恩恵にあずかったばかりではなく、その発展の成果を世界平和と人

類の繁栄へと広げつつある。

しかし、発展や社会改革は犠牲を伴うという警告がなされなくてはならない。大事にすべき価値や豊かな文化的伝統はこわされる。受け身の態度と、独自性のなさが生まれてくる。家族の絆や人間らしい生活の価値は、物質的な利益や一時的な便宜さと引き換えに失われるべきではない。

実際のところ、日本人は日本の素晴らしい価値や文化を保存しながら経済的に発展するというバランスを保つために、努力している。問題はどのようにそのバランスを維持していくかということである。もし、その発展の弊害が避けられないものならば、次の世紀に入ろうとしているこの時、どの程度日本人の国民全体の生活への影響が出るのか、そして将来にかかわってくるのかを鑑みて、優先順位というものを与えられなくてはならない。

溶解

アイリーン・マルト・ロレホ
(経済Bグループ)

溶解

きのご裳

紫霧そして溶ける身体

建物はぼろぼろに崩れ、眼窩はえぐられる

歴史における言葉のない証言

突然広島は

立ち上がる

言葉が

ほとぼしる

むせかえる河川

徘徊の通り

切られた首

しかし、その暗闇が

光を産み、そのいまわしさは

美しい; 暴力と平和

私は千羽鶴の束をここに捧げよう

私にとって衝撃的だった広島。

ビデオが上映され、言葉にされなかった歴史が溶けだす。死は逃れたが手足を失ったり、傷を負った罪のない子供たちの映像は私の喉をしめつける。彼らへの思いはさまよい、戸惑い、消え去り、私を苦

しめる。生命と財産の破壊と混沌は考えただけでも恐ろしい。

今まで原爆に無関心だった自分を反省し始めた。結論はひとつ。平和。これは約束。

日本 驚くべき光景…そしてそれ以上

ジェンマ・ファルギ

(農業グループ)

畏怖の念に打たれる。

これが日本の土を初めて踏んだ時に私が抱いた思いである。この短い30日間の滞在で、私は日本を丸ごと学び、吸収し、味わった。これは必ず生涯、もしかしたら死後の世界にまで続く経験だったと思う。

畏怖の念は、すべての手続きが何の滞りもなく行われた成田空港での驚きに始まり、最後の最後まで続いた。旅行日程（それを表現するには「多忙を極めた」では控えめ過ぎるほどののだが）に従って、私たちははるかな北国から南の地方までずらりと並んだ興味深い土地の数々を巡ったが、そこで感じとったコントラストの妙に私は驚き続けてきた。東京のペースの速い都市生活から、大潟村（秋田県）や太古町（青森県）の静かで単純な暮らしまで、ダイナミックで繁栄した産業の中心地から、北の穏やかな、ゆっくりと減少しつつある農業地帯へ、また、東京の現代的生活が新しく採り入れられたものから、京都で見た、日本の荘厳な過去や広島から学んだ悲しい過去と試練まで、数あるなかで、これらのすべてが印象的で、学びの豊かな源泉だった。

このプログラムによって、私たちは多くの日本人と出会い、友達になることもできた。東京のJRで隣り合わせになった好奇心いっぱいの人から、秋田の見識ある農業者たち、手厚いところではない温かさで私たちを迎えてくださった青森のホストファミリー、バスの親切なガイドさんや運転手さん、私たちをお世話くださった関係団体の皆さん、とても親しみやすいコーディネーター、忍耐強い英語通訳者など、100人を優に上回る方々を挙げるに留めるが、このすべての人々が純粋な親切と温かさを示してくださった。

もちろん、私たちの短い滞在期間中、すべてがスムーズにいったわけではない。ホームシックが最初

の1週間が過ぎる頃に忍び寄って来て、私たちの最大の敵となった。言語の壁の厚さも時折超えがたいもののように感じられた。練習を繰り返したおかげで、私たちは一つの行動から次の行動へと予定時間内に移る技術を身につけたが、そこでは1秒、2秒が問題となるのであった。日本の料理を長く食べ続けたために、故郷フィリピンの料理が恋しくてたまらなくなってしまった。新しい友達との涙と抱擁に彩られた別れは、私たちが最も憎んだ光景だった。でも、これら以外はすべてがうまくいった。

これまでの27日と19時間（私がこれを提出する段階で）を振り返って、私たちの28日間の滞りを考えてみると、今回の経験は私を大きく変えたと言わざるを得ない。それはおいしい日本のごちそうを食べすぎて増えてしまった私の体重のことも、吸収した知識のことも、また新たに結ばれた友情のこともなく、私が全く予期しなかった形で起こった。この短い滞りは私の記憶に永遠に影響を与える（そしてすべてのシャッターチャンスにすかさず撮った10本のフィルムの中に留まる）だろう。簡単に言えば、日本は多くの面について、フィリピンのような開発途上国が、いつかはあのようになろうと憧れる対象の典型なのである。

さよなら、そして、素晴らしい思い出をどうもありがとうございました。日本、本当に驚くべき光景……そして、それ以上。

ASEAN諸国間の友情と結束

マリア・ジョセフィン・デューケー

(ASEAN混成経済2グループ)

青年招へい事業の今までの参加青年と同様、私たちにとっても日本での経験は、末永く大切に心に抱き続けられるものであると確信している。このプログラムに、十分に成功したと満足させるに足る目標があるとすれば、それはきっと互いの信頼と友情を通じて結束を固めるということだと思う。私たちの築いてきた友情の絆はまさにかげがえのないものである。

日本人青年と行ったグループディスカッションや親睦会、ホームステイ、そして他のASEAN諸国参加青年との1カ月にわたる日本国内旅行、これらすべ

での体験を通し、隣国の文化に対する自らの洞察力が豊かになり、またそれらの国々の経済の動向に対し、ある程度見識を深めていったのである。今まで日本と各ASEAN諸国との交流が、時間的に短く、かつ限られたものであったというばかりでなく、マスメディアから流出する情報にさらされてきたことによる、私たちの日本に対する偏見を、おそらく取り除くことができたのではないかという点では、私を含む他のASEAN参加青年たちにとって、このような直接的日本人青年との交流が、相互理解をさらに深めたと確信している。最も重要なことは、私たちの文化的背景、すなわち宗教、人種、言語がたとえ異なるろうとも、世界中のすべての人々の平和と繁栄を願って、いかに私たちが結束していくかという永続的な思いを、このプログラムを通じて持ったことである。これは私たちが抱く夢であり、この夢を実現のものとするよう、すべての人々のためまぬ努力を切に願うものである。

■アジア

■シンガポール

私の見た日本

パン・キー・メン・アルヴィン
(教育グループ)

日本に到着したその日から、私たちは2人のチャームिंगなコーディネーターのお世話になることになった。長谷川さんと高野さんである。2人はとても親しみやすく、私たちの心を和ませてくれた。東京での肌寒い日、ふとシンガポールの熱い太陽を思い出してしまった時など、2人は心を配り、気を使ってくれ、私たちのホームシックを解消してくれた。小柄で誠実そうで上品な村雲さんがWYVEAから登場したのは2週目に入ってからであった。3人のコーディネーターが私たちの仲間として、いかに私たちをリラックスさせ、日本での滞在を最高のものにしようとしてくれたことか。

プログラムのハイライトは下呂で行われた3日間の合宿セミナーで、私たちは日本人参加青年と日本・シンガポール両国の教育制度について有意義な話し合いを持つことができた。ゆるやかにうねる山々、青々とした牧場、そして温泉、といった息を飲むような下呂の景色はシンガポールでは決して体験できないものであり、牧歌的な田園風景であった。また、ここ下呂では私たちの多くが生まれて初めて日本式のお風呂を、しかも温泉で経験することになった。

石川県では、学校を何校か訪問し、小松市と加賀市の両市長を表敬訪問した。また、茶道や華道、弓道といった日本文化を体験する機会もあった。いうまでもないことだが、日本の生活を知る最良の方法は、日本の家族の中に入ってみることである。ホームステイは私たちの日本滞在中、最も思い出に残るものであった。ホストの家族の皆さんは私たちを温かく、広い心でもてなしてくださり、私たちは皆、心を打たれた。言葉が通じない場面もあったけれど、私たちは言葉なしでも私たちのホストファミリーと心を通い合わせることができた。実際、家族の方々は私たちに常に気を配り、思いやり、もはや言葉の壁は存在しなかったと言える。私たちが家族の方々と育んだ気持ちの絆は必ずしも言葉を必要としない。ホストファミリーに駅でお別れをするのはとてもつ

らしいものであった。

広島が見学旅行の始まりであった。悲劇的な過去を持つ歴史の都市は、世界初の原子爆弾の恐ろしさを物語る。平和記念公園を訪れたが、ここは灰の中から不死鳥のように蘇ってきた街の永遠の平和を象徴する広島のシンボルであった。私たちはそこで「広島一母たちの祈り」という映画を見て、心を揺り動かされ、涙を流した。

しばしば言われることであるが、私たちは物事があるがままに見るのではなく、そうあってほしいというものの見方で見る傾向がある。日本に来る前は私が知っていた日本というものは、本からの知識か、他人に聞いた話からのものであった。私が見てきた日本というものは、見聞きしてきた日本であった。しかし、1カ月の楽しかった滞在が終わった今、私はこの美しい日本、そして素晴らしい日本人というものをあるがままの姿で捉え始めている。私たち21人が日本人の友人たちと結び得た友情を育んでいくことを願ってやまない。

素晴らしい日本の思い出よ、永遠に！

回想

ロー・チェ・チュアン
(社会開発グループ)

コーディネーターがこの日本滞在についてのエッセイを書くボランティアを募った時、私は即座に手を挙げた。友人のハリスが私を見て、「ごますり？」とふざけて言った。それは私がボランティアを買って出た理由とはほど遠い。このプログラム申いろいろと考えたことがあり、ぜひとも嘘偽りのない考えを表したかったからだ。

当然ながら相違というものが存在する。言語、外見、習慣、文化、価値観の違い、といった克服不可能に思える相違である。国籍がさらにそれを助長する。日本人であるあなたとシンガポール人である僕を分ける便利なラベルが国である。だが、疑問が残る。

「私たちは本当にそんなに違っているだろうか？」

「もし違っていたとして、それが重要なことだろうか？」

最初に分かったのは、この神話が偽りだとい

とだった。恐らくもっと大切なのは、この障壁がどんなに簡単に克服されてしまうか、ということだろう。心を開いて友情を通い合わせればいいのである。実際にそうだった。私たちは日本文化、生活様式を学び、その違いを尊重するようになった。さらに、日本の若者との交流や討論を通して、そういった違いを超えて、思っていたよりも多くの共通点があることに気がついた。親切心や思いやり、寛容さ、心配事、問題、諸々の思想や不安といったものである。友情は、私たちが問題を分かち、互いに助け合って進んでいくための架け橋なのだ。

そのような友情は自然に生まれるものではなく、違った環境に慣れ、最終的に相違を克服するまでにしばらく時間がかかる。シンガポール人は一般的に、より率直で、時にぶっきらぼうである。そして私の個人的な意見だが不平不満が多い。しかしそれは悪意から来たのではなく、習慣なのだ。たとえ不平不満を言ったとしても、心の中は感謝でいっぱいなのだ。本当に私たちになされたことすべてに感謝しているのである。私たちの素敵なコーディネーターは、私たちのどんな必要にも応じてくれ、親切で理解を示してくれた。JICAは寛大にも私たちのために予算を使ってくれ、工夫を凝らした企画で私たちを招いてくれた。大阪市青少年国際交流協議会のスタッフ、ボランティアの方々の温かいおもてなしと彼らの作ってくれた興味深いプログラムを忘れることはできない。勤労厚生協会も同様である。

感謝の気持ちを表し、私たちは素晴らしい思い出を持って帰国するが、もっと大切なことは僕たちが友情の種を蒔いたということだ。それが花咲くまでには長い時間がかかるかもしれない。この旅で出会った素晴らしい日本の友人の皆さん、さようなら、本当にもう一度お会いしたいと思います。そしてシンガポールにも来てください。

日本での日々を振り返って

ペリス・エイドリアン・レジナルド
(経済Bグループ)

私たちは、期待と不安の入り交じった気持ちを胸に秘め、シンガポールを後にした。出発前の簡単なオリエンテーションでは、異国の地、日本でかろう

じて生き延びるための手段しか教わらなかったの、初めて日本人と会うというのに心の準備もできていなかった。私たちのグループを担当するコーディネーターから、親しみのこもった笑顔と「おはようございます」という温かい言葉で迎えられて、グループみんなの緊張が一気にほぐれ、これから始まる日本での生活がきっと楽しいものになる予感がした。来日するやいなや1週間の共通プログラムが始まり、日本の社会や経済、歴史の基礎的な知識を得た。このプログラムのハイライトとなったのが体験的日本語学習や山梨での合宿セミナーで、そこには日本人ボランティア青年との型にはまらない触れ合いがあり、この2つのプログラムのおかげで私たちシンガポール青年は日本人との対話の機会を得、彼らの生活様式を学ぶことができたのである。

地方プログラムを振り返ってみると、異国の地でのわが家とも呼べるJICAの大阪国際センターや中国国際センターがまず頭に思い浮かぶが、このほかにも効率のよい工場、地方公共団体など、私たちが訪れた数々の興味深い場所が思い出される。また、心と家の扉を開き、温かいもてなしの気持ちで私たちを受け入れてくれた24のホストファミリーのことも忘れないだろう。そして、日本を去る今、お酒を飲む前に延々と続く乾杯、楽しい語り、そして温かい日本人々を、私たち全員が共有した思い出として持って帰る。

ロバート・フロストの詩「星」の最後の数行は、「日出づる国日本」からの旅立ちを目前に控えた私たちの心境を如実に物語っているので、ご紹介したい。……群衆がやりすぎてしまうことがある
それが称賛であれ非難であれ……
そんなときには、何か星のようなものを選ぶのだ心の揺らぎを抑え、落ち着かせるために……
私たちの「星」は、日本で過ごした日々思い出と、日本で築いた変わらぬ友情といえるだろう。

日本発見

ナズリーン・イブラヒム
(経済A1グループ)

1カ月前、お互いに知らないもの同士の20人のシンガポール人が、JICAの青年招へい事業で顔を合わ

せた。そして1カ月後には、私たちは仲よしになっていて、一緒にわくわくしながら日本の見聞を広めていった。その間私が最も感動したのは、日本の近代化と伝統の巧みなバランスのとり方だ。忙しくて、無味乾燥な日本の都市生活を体験しただけでなく、日本人の温かい心や寛容な天性も発見した。ハイライトは、週末の日本人家庭でのホームステイだった。典型的な日本人の生活をじっくり見ることができた。日本人は私と全く異なるどころなく、家庭生活や習慣を大事にしていることが分かった。

素晴らしい思い出とたくさんのおみやげを持って帰国するが、日本は歴史の試行錯誤をくぐり抜けてきた、実にダイナミックな国であることを忘れないだろう。富士山、広島平和記念公園、静かな庄原の町、そして京都の美しいお城やお寺などの姿は、いつまでも私の心に焼きついていることだろう。私の日本理解を深めてくれた日本訪問は、いつまでも記憶に残るだろう。

日本での1カ月

ケック・スーン・ブエイ・ドロシー
(経済A2グループ)

1997年6月19日から7月18日までの1カ月間、私たちは日本の生活を体験する素晴らしい機会を与えられた。この1カ月間に日本の文化、伝統、習慣を真に理解できる多くの体験に遭遇した。整然と組まれたプログラムは、日本人の生活様式に対してより深い洞察を可能にしてくれた。

日本についての有益な講義は日本の歴史と経済の知識を高め、日本語学習は日本の友人との触れ合いと交流を楽しく、たやすくさせた。江戸東京博物館と武道館の施設見学は有意義で興味深く、様々な団体の担当者の熱心な姿勢が随所でとても印象に残った。

京都における滞在は東京の忙しい生活のペースとは異なるゆったりしたもので、京都の豊かな歴史と文化遺産にひたることができた。私たちのホームステイプログラムは本当に思い出に残る出会いとなり、日本の家族と接する貴重な経験になった。私たちが受け入れ家族と築いた特別の関係はとても言葉で表せるものではない。

広島記念公園と資料館の見学は、心打たれる体験である一方、倉敷の美観は心が休まった。

私たちは日本の違った面に触れて数々の忘れ得ぬ思い出を国に持ち帰る。多くの友達、日本の新しい家族もできた。日本の滞在を思い出深く、実りあるものにしてくれたJICA、JICE、JEC、京都ユースホステル協会、コーディネーターにとっても感謝している。

日本の印象

フー・サイ・ジウム
ルーク・ガウション・チェン
カライバニ・ラム
(ASEAN混成経済3グループ)

私たちは各々の経験に基づいてそれぞれ違った認識や期待を抱いて日本へやって来た。しかし、講義を受けたり、日本の人々と出会い、交流したり、企業を訪問したり、また景勝地を楽しんだりして1カ月を一緒に過ごしてみると、日本のいくつかの印象的な面については一致していることが分かった。

【勤勉で規律正しい人々】

日本人は多くの称賛すべき点をもっている。若い時から伝統的な勤勉さと規律正しさを身に着けており、それが彼らを素晴らしい集団にしている。彼らの社会に対する関わりと貢献は学校においても職場においても同じように見られる。人々の親切な性格と款待の気持ちに本当に感銘を受けた。日本の教育制度は、規律正しく忠実な労働力を生み出し、それが戦後の高度成長の原動力となっていた。21世紀を目前にして、日本はその教育制度の改革を通じて創造性と個性を育てようとしている。これが達成されればバランスのとれた創造的な先駆者と献身的な労働者により、日本は一層の目的達成と競争力を身に着けることになるであろう。

【文化遺産】

戦後の高度経済成長による近代化と外国からのものの吸収のうねりは、日本の伝統文化に幾らかの影響をもたらした。日本人はそれをなんとか乗り越え自分たちの文化遺産を持ちこたえた。伝統文化はよく保存され若い世代に受け継がれている。1カ月の滞在中、私たちはこれら多くの文化遺産を見

ることができた。寺院や古い橋から伝統織物や茶室に至るまで、日本人は「古いもの」と「新しいもの」を驚くべき正確さと、巧みに処理する技にたけている。これら文化遺産を大切にする姿勢は、多くの国が日本から学ぶことができるものの一つであろう。また、これら豊かな文化は、発展し現代的な方法を採用している国、日本がバランスを保つことにも役立っている。

【技術的発展】

現代的な方法というものは、新しい技術と新しい考え方をもたらす。この点においても、つまり、学び、採用し、適合させ、改革するという点に関して日本人は驚くべき才能を発揮した。すばやく学び国内の需要に合ったように仕立て上げるという能力はうまく機能した。さらには、コンピューターを先端的な分野へいち早く導入することによりさらに効率よくなった。私たちは、コンピューターが、信じられないほど上手に似顔絵を描くのを見た。また、自動車工場では、コンピューターやロボットが導入され多くの作業が自動化されているのを見た。このように既存の、あるいは、新しい技術を刷新したり新しい活用方法を見つけたりする日本人の才能は、私たちの国々が熱心に学ばなければならないことであろう。

日本はバブル経済の崩壊から徐々にではあるが確かに回復しつつある。もちろん60年代の2桁成長率と比較すると依然として低い状態にあるが、日本の多国籍企業は、生産拠点を途上国に移したり投資したりすることにより、高い労働力と不利な為替レートに対処しようとしている。日本人は、間近に迫った経済、教育および行政の改革を通じて、解決策を見つけ出し、21世紀の世界で新しい水準、新しい役割で日本をさらに躍進させることができることを、私たちは確信している。

■アジア

■タイ

日本での思い出

ポンチャン・テーブランパン
(教育グループ)

日本は2000年以上も続く豊かな文明を持つ国である。この歴史が生み出した、美しくたおやかな文化は国の誇りともいえよう。またそれと同時に美しい自然をも持ち合わせている。例を挙げればきりが無いが、神社仏閣、歌舞伎、能などに代表される伝統芸能などだ。これらは日本人の特徴と精神を表しているともいえ、現在の日本人にも脈々と息づいている。その日本人というのは、いろいろな側面を持ち合わせていると思う。世界をリードするような高度な技術を持ち、大都市は躍動している一方で、地方に行けば静かで落ち着いた雰囲気を残していて、バランスのとれた国力を感じる。感動した挨拶の言葉に「イラッシャイマセ」があるが、日出づる国日本の歓待を表すこの言葉の意味に、深い歴史と豊かさを垣間見たように思うのである。

このような体験をすると、胸が躍るような気分になる。この国を訪れる機会を得てうれしく思う。成田空港に到着した時に心の奥底にあった不安が、喜びに変わっていった。微笑みを以てこの挨拶の言葉を聞いた時に、今までの心配事や疲れが嘘のように消えていったのだ。

合宿セミナーでは日本の青年たちとの共同生活を通じて、日出づる国日本の文化や習慣を学ぶことができた。角度を変えて言えば、日本青年たちと私たちの間に新しい友情が構築されたのだ。言葉の障害を乗り越えて、私たちは様々なことを話し合った。お互いの価値観や国民性の違いを認識し合い、友好関係が結ばれた。参加した日本青年は将来を担う素晴らしい人ばかりで、私たちのために一生懸命英語で話してくれた。この英語に関しては、この後訪れた町でも同じような経験をし、私たちと意思の疎通を図ろうとしてくださる多くの日本の方々に胸をうたれた。

そのほかに、私たちが感動したのは、自然が効率よく保護された町並み、清掃の行き届いた道路、森林破壊することなく貫通させたトンネル、木と紙で

作られた家々が調和よく並ぶ町並みなどだ。これらの美しい日本を守り続けるために、多くの若者たちが努力を続けているとも聞いた。日本の将来の明るさを確信した。

ホームステイに関しては、最初は皆不安だった。しかし美しい自然に育まれた地方都市・福知山市を訪れた途端、たちまち不安が吹き飛んだ。古さのなかに新しさが調和した古都福知山。優しく思いやりのある家族の一員に迎えられ、私たちは最高のもてなしを受けた。おいしい食事に舌鼓を打ち、寝る暇を惜しんで語り合った夜、2泊3日が短いくらいの充実した日々だった。新しい家族ができたようで感激でいっぱいだ。最後の日は別れるのがつらくて涙ばかり流していた。またいつの日か会えることを祈りながら、後ろ髪を引かれる思いで宿舎へと向かった。

日本人は規律正しく、時間に正確だ。また、困った人には優しく手を差し伸べ、皆の幸せを願っているように見受けられた。関係者の皆様の、ご尽力に厚く感謝したい。日本で得た数々の知識や経験を私たちは将来は活かしていきたいと思っている。

たおやかな歴史に育まれた美しい桜の地に幸あれ。私たちはこの地を訪れたことを誇りに思い、一生の糧としたい。

羽ばたく友情の鶴

ダララット・ウィラポーン
(社会開発グループ)

ASEAN諸国および日本の国のリーダーたちの、この地域に平和と友情を築こうという理想のもとにこの青年招へい事業が生まれ、私たちタイの社会開発グループ25人が参加する機会に恵まれ、日本の人々との交流を通じて互いに学び合うということが実現された。

実際、学ぶということは、タイにいながらも日本のことを学ぶことはできるので、時と場所を選ぶものではない。とはいえ、生まれ故郷を飛び出し近隣の友好国日本に来て、その国の有り様と変遷を目の当たりにすることで、新しい認識や見解が私たちの中に芽生えてくるのを感じた。まさに、他人を知ること自分自身を理解することなのだ。

タイでの事前研修に始まり日本での様々なプログラムに参加するなかで、日本の社会に顕在する良い面と悪い面を共に見ることができた。この国は卓越した西洋近代技術と東洋的で長い歴史に支えられた深い精神性に富んだ文化を混在させている国なのだ。

いろいろと学んでいくうちにだんだんと分かってきたこと、それは一つの国の枠の中で考えることではなく、国境を超えた人類全体に繋がる問題なのだ。私たちは共にこの一つの青い地球に住んでいるのである。

この平和と友情の大切さを私たちは広島で痛感した。それは決して風の流れや戦争の武器などで生まれるものではなく、私たちすべての人間の美しい心からのみ生まれてくるものなのだ。

そして今日、少女さだ子の鶴はその千羽だけでなく、何千何万という鶴が折られ続けている。これは、この空一面を覆い尽くし、飛び交い、永久なる平和と友情の鶴が舞い続けて欲しいという人々の強い願いの証なのだ。

ホームステイ

カノッカーン・ウィーラクン
(農業グループ)

友情……それは皆が求め、常に得ようと努力しているものだ。私たちタイ農業グループのメンバーもそうだった。友情は、青年招へい事業に参加した一番大きな目的だった。そしてその思いが裏切られることはなかった。私たちはたくさんの方の友情を得ることができた。成田に足を踏み入れた時からコーディネーターの明るい笑顔が絶えなかった。私たちは毎日楽しく、とても仲良く過ごすことができた。そのなかでも私たちの印象に最も残ったのは沼津でのホームステイだ。それはプログラム中最も大切な友情の湧き出る泉だった。

私たちとホストファミリーとは国籍も宗教も文化習慣も違い、また使う言葉も違っていたが、一緒に過ごしてみるととても心地よくいられたのだ。ホームステイの前は皆それぞれ、うまくいか、問題が起きないかと様々な心配をしていた。ホストファミリーが迎えにくる日には、ホームステイはどんなだろうか、自分たちが考えていたようなものだろうか

と皆で話し合っていた。そしてとうとう日本人と一緒に過ごす日々が始まった。最初は私たちも間違いを恐れてびくびくしながらホストファミリーと話し、コミュニケーションもなかなかうまくいかず、気詰まりだった。が、できるかぎりの日本語を話し、英語をまじえ、それから一番簡単に、習う必要のない言葉、ボディランゲージを使ってみるとずいぶん意思が通じ合うようになった。それからは日本人の生活のいろいろなことが見えてくるようになった。たとえばお母さんが家事のほとんどすべてをやるとか、お風呂に入るのはお客様が最初だとか、毎食箸を使い味噌汁を飲むとかいうことだ。そういうことが私たちには珍しく、新しい経験だった。それからホストファミリーはお習字教室や私たちが見たことのない日本の踊りなど日本文化を理解するのに役立つ所に連れていってくれたし、富士山、海岸、水族館などにも遊びに連れていってくれた。そういったことすべてが楽しく興奮に満ちていて、私たちは幸せのうちに日本人家庭になじんでいくことができたのだ。家族全員が私たちに常に親しく接してくれ、最初の心配は徐々に連帯感に変わっていった。食事も私たちに合わせて工夫して、タイの即席ラーメンを日本風の焼きそばにしたり、日本のスープをタイ風に味付けしてくれた。なによりも日タイ双方がお互いに仲良くなるために適応する努力をし合ったことが、連帯感をだんだん強くしていったのだと思う。最後はホテルに帰りたくなくて、あと1週間ホームステイしたいと思ったほどだった。が、いよいよ別れの日が来た時はお互いとても親しみを感じながら、また会う機会が絶対来ると確信してお別れを言うことができた。

ホームステイをした3泊4日は、愛情、連帯感など本当にいい感情が知らず知らずのうちに生まれてきた。これらはホストファミリーと私たち両方が友情を育てようとお互いに一生懸命努力したことから生まれてきたものだ。そして私たちが最初に望んでいた以上の結果となった。私たちは皆この気持ちをお互い大切にとっておきたいと思っている。

狩野子

(沼津の狩野川に因んでホストファミリーがつけてくれた名前です)

私が見たこと感じたこと

ヌラック・ジウシウ
(経済Aグループ)

まず最初に9月10日から10月9日にかけて、訪日の機会に恵まれて感謝している。この機会を与えてくださったことに対して日本国政府に感謝の意を表したい。そして私たちの面倒を見てくれたスタッフの皆さんにもお礼を述べたい。おかげさまで無事プログラムを終えることができた。

次に30日間にわたる滞在期間の感想を述べたいと思う。

日本のライフスタイル——東京のような大都市や松山でのホームステイや広島と京都の地方都市訪問を通じて日本のライフスタイルを経験することができた。

アートテクノロジーのオリエンテーション——日本企業は世界に向けて常に新しい技術に挑戦しているのには、いつも感心させられる。生活向上に役立つ技術を求めて企業や産業振興財団が敏感に反応している。30日間の滞在だったが、センサーを使ったホテルの自動ドアやバスに付いている自動乗車料金支払機などにすっかり魅了させられた。

社会基盤構造の進歩——東京の中心から郊外までごく簡単に行ける公共の乗り物、通信システムや自動販売機など、都心も地方都市も同じレベルで発達しているのがよく分かった。

環境問題——広島から京都と京都から東京への移動期間中、車窓から見た緑一面の景色や透き通った川の水などに感動した。また日本国民は高度な技術を発展させながら、なおかつ自然保護とのバランスをどうやって保ってきたのか不思議に思う。

システム化された管理——私たちのグループはJICA、EPIC、JYHそしてJICEの見事なチームワークにより訪日日程をスムーズにこなすことができた。これは事前の準備が完璧になされている証拠だ。そしてなによりうれしかったのは、私たちをまるで名譽ある国の代表として対応してくれたことである。いつでも誠実さをもって接していただき日本のみなさんから友情という贈り物をいただいた。お土産を交換したり、食前に「いただきます」と言う日本の習慣も覚えた。

最後にもう一度、日本政府をはじめこのプログラムにご尽力いただいたスタッフにお礼を述べたい。私たちはこの感動をいつまでも忘れることはないだろう。

日本で感動したこと

ジャールワン・スパンタネート
(経済Bグループ)

日本に私たちの一行が到着した1日目の朝、成田空港では、私たちの新しい日々が始まりを告げる光のように水平線から太陽が姿を現すところだった。その朝日の輝きは、この計画に参加して私たちが得ることになるであろう新たな知識、思想、意識、そして人々の温かさを表しているようであった。

私たちの誰もが、この計画に参加する機会を得たことを誇りに思っていた。皆一人ひとりが、自分自身の生活と社会や国の発展のために役に立てることができると新しい知識と経験を得ることができた。

日本に滞在していた間に得ることができた友情は、タイと日本の間の美しい友情の架け橋となるであろう。それだけでなく、タイ人同士との友情、またタイと計画に参加した他の多くの国との友情の架け橋ともなるだろう。

より住みやすい世界を創るために、この青年招へい事業計画の実施に力を尽くしたすべての人々に感謝したい。

この青年招へい事業のすべての関係者と、タイと日本の政府関係者、JICAとJICE、および私たちに素晴らしい思い出と友情を与えてくださったすべての方々に心よりお礼を申し上げたい。

「ミナサンノコトハ ワスレマセン」

エッセイ

ワッタナー・トーンチャイヤ
(ASEAN混成環境保全グループ)

日本、とりわけ釧路市での寒い冬の始まりは、日本人の温かきともてなしによって迎えられた。そして、私たちASEAN混成環境保全グループの参加者は、ASEANと日本の友情関係をさらに発展させるこ

とができた。

私たち全員が、日本人のおもいやりと優しさに触れ、特に合宿セミナーの日本人参加者や、ホストファミリーの皆様の温かい心遣いを感じた。

私たちはこのプログラムで友情を深めて帰国の途につく。そして友情のみならず、ここ日本の環境関係施設の講義や施設訪問により、さらなる専門分野である環境に関する知識を深めた。

このプログラムを終え、帰国した後も私たちはASEAN諸国と日本の協力関係、特に環境保全分野での協力が進むことを期待している。

ASEAN混成環境保全グループを代表して、この1カ月が一生忘れられない思い出になったことに対して、JICAと日本の皆様に感謝している。

コップクン マー。

どうもありがとうございました。

■アジア

■バングラデシュ

日本は最高

モハマド・タジュール・イスラム
(保健医療グループ)

世界中で日本は最高

日本の人々は大空を飛び続ける
使命をもった鳩のように。
礼儀と作法を飾りにして。

おいしい食事をいただく時
日本に暮らしているかのよう
世界中皆知っている、日本は最高。

彼らは素晴らしい文化を生み出す
ちょうど美しい月のように。
時間厳守を考える時
それは日本人の傾向

広島、被ばく地の名前
けれど全世界の平和を築く
我々の声と祈り
すべてのみたまよ、安らかに憩え
過ちは繰り返さないから。

日本は最高

我々は最高を知っている。
世界は最高を知っている。

■アジア

■ブータン

生涯忘れがたい経験

ブータン参加青年
(教育グループ)

日本が「日出づる国」と呼ばれたのも無理はない。私たちは日本についてある程度のイメージを持ち、予想はしていたつもりだったが、実際に来日してみても仰天してしまった。

日本は世界でも最も進んだ国のひとつだが、自然の美しさは今も失っていない。大都市の周辺にある緑豊かな森や青く澄んだ海を見るたび、日本がいかにかにして開発と環境保護の両方を実現することができたのか不思議に思った。私たちにとって日本はまさに「日の沈まない国」だった。毎日が驚きの連続で、もしかしたら夢を見ているのではないかと、何度もほおをつねってみた。

1カ月に及ぶ日本での滞在は素晴らしかった。その思い出は甘い夢のように、いつまでも大切にしていきたい。

■アジア

■インド

インドの代表団の日本の印象

セラマントウラ・スリニワサ・ラジャ
(教育グループ)

江戸東京博物館と日本武道館の訪問は、日本の歴史と文化を知るうえでよい経験だった。熱海での合宿セミナーはまるでサンガムのように、日本人と様々な分野について意見交換できたよい体験だ。最初は皆はにかんでいたが、すぐに私たちは心から楽しめるようになり、ここでの体験は温泉の思い出とともにずっと心に残るだろう。

ホームステイは私たち人類はひとつであることを身をもって体験し、日本文化をマクロ的に視察できるよい機会であった。またいろいろな科学館の訪問によってさらに知識を深めることができた。学校訪問は私たちの職業的専門性を高め、特に教員との討論はインドの将来の教育制度にたいへん役に立つ体験だった。高山市への旅はとても楽しく、日本の山や緑などの風景を見ることができた。

広島での原爆資料館の訪問は身の震える体験で、私たちは全員それぞれ心の中で世界平和を祈った。また大阪の水族館（海遊館）で海の生物を観察できたことは素晴らしい体験だった。古都京都の訪問によって日本の伝統と歴史にふれることができた。

1カ月のこのプログラムは本当によく計画され実行された。毎日毎日わくわくする体験を与えてくれた。すべてとても啓蒙的でしかも最高の内容だった。私たちはこのプログラムがこのように大成功したことに対して、この仕事に関わったすべての人々に心から深く感謝したい。私たちはこの素晴らしい思い出をずっと大切に、友好のメッセージをわが母国「バーラタ」に運んでいく。この素晴らしい世界で私たちすべてが永遠に友人として生きていけることを祈る。

ジャイ・ヒンドゥー! (インド万歳!)

(注：バーラタはヒンディー語でインドの国家名)

■アジア

■モルディヴ

思い出深い旅

アダム・シャリフ
(教育グループ)

このたびの日本への旅は、幸福と興奮に満ちたものだった。私たちに世界の先端技術に触れ、先進国の生活を垣間見る機会を与えてくれたのである。

日本は開発途上国にとって模範的な国だと思う。その成功は、規律正しい行動や教育制度、そして勤勉と時間厳守によるところが大きい。

教育を受けた国民は、国の開発と発展のかなめと言えよう。日本では義務教育が完全に普及している。また文化遺産と自然の美を次代に伝えるため保存しようとする姿勢は、先進・途上国を問わず、世界に誇れる日本の美点だと思う。

日本の豊かな文化遺産のなかには、美術的価値を持つものや、その長い歴史が生んだ「ゆかりの地」や記念碑なども含まれる。京都や島根、大阪、広島、東京などの都市やその周辺地域もそうだが、宮島や富士山でも伝統的な文化、神社仏閣、峡谷、湖、山々などの美しい景色がみごとに維持され、保護されている。

今回の来日は、生涯忘れがたい多くの楽しい思い出を私にもたらしてくれた、まさに夢のような旅だった。

■アジア

■ネパール

新しい水平線

ラジェンドラ・クマル・グルン
(教育グループ)

私にとって、日本は日出づる国、相撲の国、地震が頻繁に起こる国、初めて原爆を落とされた国、世界の他の国々にとってはおとぎ話のような発展を遂げた国だった。

私は、ここを訪れる前、日本に対していつも内心恐れを抱いていた。しかし、実際に来てみると、人々は非常に規律正しく、几帳面で、愛情深く、思いやりがあることを知った。熱海や駒ヶ根といった、分野別プログラムで訪れた先々で、私たちは熱烈な歓迎を受けた。そして、人々はとても温かく、友好的だった。

私は、駒ヶ根での滞在中の出来事を言わずにはいられない。ある日、私が買い物に行くと、店の主人が、どこから来たのかと私に尋ねた。私がネパールから来たことを告げると、彼はとても喜び、たくさんの質問を私に浴びせてきた。私は殊まずに、彼の質問に答えた。すると、彼は、お土産にと綺麗なハンカチをくださったのだ。私は、彼の行為にとっても感銘を受けた。このような出来事は、ほかにもたくさんあったが、ここには書ききれない。

私にとって、今、日本は愛の国、平和と繁栄の国、素敵な人々の国、そしてもちろん、友情の国だ。私は、この国を離れるのは気が重い、その代わり、何トンもの愛を持って帰ろう。神様、愛という重い荷物の超過料金を航空会社に払わなくていいことに感謝します。

■アジア

■パキスタン

夢の国・日本

イルファン・アフマッド
(公務員グループ)

日出づる国、日本。いつも私にとっては夢の国であった。色鮮やかな着物、木の下駄、扇子、畳の家、生け花、武道、茶道など……。これらは日本に来る前から私が魅了されていたものである。JICAの青年招へい事業によって日本を訪れる機会が得られた時、私は長年の夢が叶うような気がした。

パキスタングループの他の19人メンバーと共に、私たちは佐島、新潟、京都、そして広島を訪れた。新潟ではホームステイプログラムで日本人家庭に滞在するという貴重な体験ができた。そこで私たちは典型的な日本人の生活を観察することができた。日本文化における2つの特徴的な面は誰もが感じたことと思う。伝統的な面と現代的な面である。近代化した高い生活水準を維持しているなかにも、しっかりとした伝統的な家族の絆も、少なくともある部分では、保ち続けていた。そしてこのことは日本をお手本としてきたパキスタンのような開発途上国にとっては、たいへん励みになることである。

広島は私に深い感動を与えてくれた。広島で起きた悲劇はまだまだ終わっていない。身体、そして心に受けた傷は新しい世代へと受け継がれ、その悲劇はいつまでも心に残っていくものであると思う。核兵器による大惨劇は二度と世界で繰り返してはならない。すさまじい爆風、激しい熱線。核兵器の恐ろしさを想像するだけでも背筋を突き抜ける衝撃が走る。私は重い気持ちで広島を去った。地球の平和と調和をどのように維持し、そのために何をしていったらよいのか、世界が再び考え直してみる時期にさしかかっているのではないかと思う。

■アジア

■スリ・ランカ

鮮やかな日本の思い出

アブドゥル・カフォール・ザルーク
(教育グループ)

楽しくて素晴らしい日本の旅を体験できて、私はとても満足している。1カ月の滞在中、数々の青年招へい事業のプログラムに参加したが、すべてがよく準備されていて有益だった。

合宿セミナーで館山市(千葉県)の教員と意見交換し、日本の教育制度についても知ることができた。学校訪問では、日本の教育現場を見ることもできた。

東京でも国会や放送大学を訪問し、楽しい時間を過ごした。京都は文化的・歴史的な場所を楽しみながら見学し、いろいろな情報を得ることができた。広島では平和資料館へ行き1945年に原爆の被害を受けた高橋昭博さんに会った。一生のうちでとても貴重な経験だった。私や友人の置かれた状況にも思いをはせ、戦争がどんなに人間性や自然を破壊するものであるかを、改めて思い知らされた。

最後の訪問地は佐賀だった。美しい自然に恵まれた心やさしい人々の住む所だった。多くの学校や県庁を訪れ、教育現場等を視察した。佐賀県立商業高校の生徒たちは、スリ・ランカ国歌を演奏して迎えてくれた。私たちは深い感動を覚えた。2日間のホームステイもまたたいへん良い経験であった。ホストファミリーは私たちを温かく迎えてくれ、親切に接してくれた。この経験はいつまでも私たちの心に鮮やかに残ることだろう。ホストファミリーにさよならを言うのはとてもつらかった。

この日本滞在は私たちスリ・ランカ教員全員にとってたいへん実り多いものであった、ともう一度書き留めておきたい。グループを代表して、こうした素晴らしい機会を与えてくれたJICA、日本ユネスコ協会連盟、佐賀ユネスコ協会、そしてスリ・ランカ政府に心からお礼申し上げます。どうもありがとうございます。

■アジア

■モンゴル

私は戻ってきます

バトライ・チョローンフー
(勤労青年グループ)

そうです、私はいつかまた日本に戻ってきます。
濃密に過ぎていったこの30日間を私は決して忘れない。すべて書き記すならば一冊の本になってしまうほどの印象深い出来事いっぱいだ。日本に来てまず目を奪われたのは、高度に発達したインフラや人々の勤勉さだった。そして、土地というものがこんなに高価で貴重なものであるということを初めて思い知らされた。また、各地で出会った人々とのふれあいは非常に素晴らしい体験だった。日本の青年たちと時に語り合い、時にふざけ合った体験は一瞬たりとも忘れることはない。本当にたくさんの友達ができた。私は風光明媚な和歌山県や、京都、広島、大阪をきっと懐かしく思うことだろう。ホームステイや、ステイ先で生まれて初めて体験した稲刈りの楽しさは一生忘れないだろう。今でも思い出すと涙が出そうになる。私に日本という国を見聞し理解する機会を与えてくださった日本の皆様、ありがとうございました。人間同士が愛情を持って接し合えば、この世に戦争や暴力は必要ない。私はこれからの人生を世界の友好、特に日本とモンゴルとの総合的なパートナーシップに捧げていきたいと思う。

■アジア

■ミャンマー

自分の目で見えた日本

ウー・ソウ・コー・コー
(教育グループ)

私たちは1997年9月10日に東京に到着した。そして温かい歓迎と心遣いに出迎えられた。私は日本の人々が本当に親切で、私たちを実の兄弟姉妹のように思ってくれていると感じた。

日本での1カ月の滞在中、日本の教育制度を見学し、それについて討議する機会を得た。また、文部省や学校を見学することもできた。生徒たちはよく教育されていると私の目には映った。教師と生徒の関係は親愛の情に裏付けられていると感じた。私にとってこれは新鮮だった。合宿セミナーや他の討議を通して、多くの日本人青年と知り合い、意見交換をすることができた。すべての討議はミャンマー青年全員にとって有用で実践的なものだった。情報交換をすることで、私たちは双方の国における制度や活動を知ることができた。

青年招へい事業は独特なものだと私は思う。このプログラムに参加することによって、私たちは日本の真の姿を経験し目の当たりにする。また、交流を通して日本人々々に対する理解を深める。さらに、日本とミャンマー間の関係をさらに強化・推進することができるのだ。

青年招へい事業参加青年として、JICA、世界青少年交流協会(WYVEA)、その他、日本人青年との友情交流の機会を与えてくれた関係諸団体にお礼申し上げたいと思う。また、滞在中、必要な助力を惜しまなかったJICAおよびWYVEAのコーディネーターにも感謝する。そして、私が得た経験と身につけた知識はいつまでも心に残り、ミャンマーの同胞にも伝えることができるだろう。

私はこのプログラムに参加できたことを誇りに思っている。

■アジア

■カンボディア

天国の島についての新しい知識

タツヌ・サルン
(教育グループ)

私たちは中学校での授業で日本について知ってはいましたが、それは地図上の国の位置や第2次大戦での天皇についての評価だけであった。このことは私たちが日本について理解したいという欲求を満足させるものではなかった。カンボディアのことわざに「百聞は一見にしかず」というものがある。私たちが最初に日本へ到着した時、すべての分野、特に文化、教育、科学などがコンピューターや電子システムによって管理されていることにとっても驚いた。

日本の状況は私に次のような印象を与えた。

戦争によりほとんどすべての建造物や施設、特に歴史的に中心となるものが破壊されたにもかかわらず、日本人は労働と創造に努力をする人々である。政府は戦争で残ったわずかな遺物を集め、ビデオを作ったり、絵画などを描いたりして文化遺産を残そうと、修復・維持に努めているが、若者は西洋のスタイルをコピーするのが好き。教育現場においては、幼稚園から大学まで、自らの判断能力等を養うための実習施設があることに興味を持った。さらに教師は政府の官庁や民間企業に行き、生徒を正しい方向へ指導するために何が必要かについて研究を行う。教育は更なる充実が期待されている分野であるが、一方で私たちは日本人、日本人学生は英語が上手に話せないことに気づいた。たとえ英語をひと言も話せなくても、良い賃金の得られる職に就けるというのは強い経済力をもつ国の現実である一方で、日本の道路標識や看板に英語があまり使われないことで、日本を訪れた外国人は言語や情報に困難を生じる。

最後に、日本政府をはじめJICA、青少年育成国民会議、そして日本の皆様が、カンボディア教育グループの1カ月間の日本滞在を支援してくださったことに対してお礼申し上げたいと思う。ありがとうございました。

■アジア

■ラオス

地球はひとつ、心もひとつ

ブンバカン・スィーサーノン
(農業関係公務員グループ)

日出づる国日本。その世界で最も進んだ平和な国に着いた日から、私たちに楽しく刺激的な生活をもたらしてくれた。

私たちが一番感動したことは、日本人のふるまい方だ。ラオス人と同じことをしていてもふるまい方が違うのだ。日本人の成功は、そのよくしつけられた態度や勤勉さ、几帳面な時間の感覚によるところが大きいと思う。

私たちは、日本人の他の人に対する敬意の払い方に感銘を受けた。日本人は人種が違っていても、世界中の人々に対して同じ対応をする。同等に敬意を表すのだ。

また独自の伝統文化もよく維持されている。若い世代への歴史文化教材として保存されている歴史的名所が多くある。

最後になったが、私たちはこの1カ月の滞中で、日本について多くのことを学んだ。そして、この経験をわが国の農業およびその他の方面に活かすことができると確信している。

ありがとうございました！

■アジア

■ヴィエトナム

青い国

ディン・チュン・フン
(公務員グループ)

初夏、初めて訪問した
黄金に輝く光の中
太陽の国に着いた
大きな海に浮かび、玉のように輝く島
私は南から北まで行った
どこに行っても、青色が目に入った
東京——目が回るほど高いビル
道路には車がびっしり通り
青い並木の影が映った
北の島北海道——何度も雪祭りが開かれたところ
遠く海まで青い絨毯が広がる
富士山——何万年も頂上に雪をいただいた
みずみずしい青色の上着を肩にかけた
瀬戸大橋——世紀の長さ
海の上に浮かぶ青い島々を結ぶ
京都——千年の歴史を持つ地
金閣寺は翠色の森の中に高くそびえる
平和公園——広島
酷烈な経験の印を記す
原爆ドームのすぐそばの
大きな美しい家々は高くそびえ
青い木の庭は、様々な深い想いを受けとめる
青色の中で、友情を温める
日本の人々と私の心との間で

自分の中の日本

ゴー・ティ・キム・ゴック
(経済グループ)

日本での青年招へい事業に参加できると知った時、私は胸がウキウキしてうれしさでいっぱいになった。経済グループのために企画していただいたプログラムはとても綿密かつ完璧で印象的であった。たった30日間ではあるが日本に滞在して、繁栄した東京や大阪の町を実際に見たり聞いたりした。そして緻密

な頭脳をもつ会社や企業、工業化、現代化の様子からスーパーマーケットや町に足早に歩く人の様子まですでに私の記憶に焼きついてた。

ここでの人々の活気がある生活は、道路や地下、川や町の高架橋に常に沸き上がるような気がした。人々の生活は絶えず成長し、発展しているようであった。また広島町のよみがえる力は日本の猛烈な活力の元であろう。そして人類の心の中に平和を願っている人の炎が絶えず燃え続けている。

整った町の中に行くと、工場の自動機械の響き音、東京中央卸売市場からのセリの声や東京証券取引所での神経を使う合図等のすべてが、私の頭に響いてうれしくドキドキさせた。

このプログラムを通して、一番印象的だったのは日本の家庭で過ごしたホームステイの日々だ。グループの参加メンバーと一緒に日本語を練習し、日本人の習慣や考え方を勉強して、一生懸命に準備した。すべての心配、不安はホストファミリーと私との情熱や誠実さによって徐々に築かれた親密さで、だんだん溶けていった。

私の知った限り、日本人は聡明な頭脳のほか、伝統的な文化を守る意識も常にもっている。日本人は会社に尽くし、共同意識が高い。また誠実で、オープンで、深い感情をもつ人々である、これらの性格は日本およびヴィエトナム青年の間の友情を維持し発展させる条件の共通点ではないであろうか。日越間の良い関係を日増しに確実にするための架け橋でもある。楽しい日々が過ぎていった。同時にこのプログラムの有益な日々が終わりに近づいている。このプログラム中、案内して下さったコーディネーター、そしてグループ内のメンバーにもお別れしなければならぬ。私の国へ帰る荷物に日本での思い出がいっぱい詰まっている。

「私が来た時その地に私は存在し、私が去った時は思い出が残る」

日本の思い出綴り

ファミ・クアン・トウエン
(教育グループ)

桜の国で知られる日本の都市、東京、宮崎、広島、大阪、京都を訪問し、それぞれの名所を見て回った。

初めての体験だった。日本に滞在した28日間は、短期間ではあったが、多くのことが私の心に深く刻まれ、筆舌に尽くし難いほど日本に対する愛着心が生まれました。これは私の人生の中で特別な精神風景のひとつだ。

日本のような世界で最も発達した国で生活している人たちは、個人主義的で実利的な傾向が強い性格を有していて、集団としての協調性に欠けていると思っていたが、私が今回のプログラムで出会った人たちは、老若男女を問わず、公務員であれ、自営業者であれ、主婦であれ、相手の気持ちを推し測り、礼儀正しく、おだやかで、訪問客を心から愛していた。日本人は、常に謙遜の心を持って他人から学ぶ姿勢があるから自分自身を豊かにすることができるのだろう。討論の場では、自分をオープンにし、相手を尊重する。日本はアジア的な協調性、高い団結性をもっている。東京の郊外を訪問した時、特にそのことを感じた。

日本人の勤勉さと、聡明さ、さらに自力で自分を高めようとする意識によって自然、伝統や文化遺産が擁護され、また他国に尊敬される程度にまで技術や経済が発展したのだと思う。

現代的な街づくり、にぎやかなスーパー、高層ビルの集まったところ、緑の樹木で覆われている公園、数え切れないほどの大小の橋がかかる曲がりくねった青い川。何百年、何千年も経った樹木の中にあるお寺、町並みの中にまじった広い森。武道、芸術、茶道、生け花はすべて日本人が元来持っている伝統の姿そのものである。過去を大事にし、自然を愛することは、日本人らしきとも言える。そういったものは、科学にもうまく取り入れられ、進歩につながったのではないか。それは、人類の最も現代的な科学技術の成果と調和して、日本を魅力のある、学ぶべき、そして、尊敬すべき国に作り上げたのだ。

私は、日本の自然、日本国と日本人について感じ取ったことのすべてを、この紙面に表すことができないことが残念である。

しかし、私が強調しなければならぬことがひとつある。それは、ヴィエトナムと日本の間に友情と素晴らしい協力関係が生まれ、発展しつつあることである。いつか、きっと素晴らしくよりよいものになる。青年とは、未来そのものである。両国の青年は、両国の関係を決定する人たちだ。青年招へい事

業は両国民の善意を互いに確認し、調和、団結、協力そして相互に利益のある関係へと導いていくものである。

桜の国に滞在する30日間

リー・グエン・ビン
(農業グループ)

今回、夏の真っ盛りの8月に日本に来た。桜の花の咲くのを見ることはできなかったが、皇居、江戸東京博物館を見学したり、日本の武道を鑑賞したり、「さしみ」という生魚料理を食べたり、「さけ」という日本酒を味わったり、徳島県の伝統的な「阿波踊り」を覚えたり、様々な体験をさせてもらった。

また、「着物」を着て「下駄」を履いている年配の女性の姿を時々見かけた。日本人は自らの伝統文化を常に大切にしようと思っているのだと実感した。また、都市での生活から地方での生活に至るまで、すべて体験することができた。都市、地方といっても全体的に見れば、生活様式やインフラ整備の度合いに大きな違いはない。とにかく、日本では国民の利益のためにすべてがよく研究され、準備されているような気がする。

しかし若者は髪を染めたり、西欧風の服装をしたりすることが流行りのようだ。また、女性はタバコを吸うなど、西洋人とそっくりな行動をとることがあるようだ。私が知り合った数人の日本人の友達は、せっかく高い給料をもらっても世界一高い物価のせいで、生活に満足することができないようである。このことも現代の日本人の悩みではないだろうか。

まもなく日本を離れるわけだが、日本もやはりアジアの一国なんだと再度感じた。今後もこの国からいろいろなことを勉強できると信じている。

■太平洋諸国・地域

■フィジー

フィジー人として感じたこと

アンディ・マリア・アグネス・ダリウ
(公務員グループ)

「本当に私たちは日本に来て、30日間滞在したのだろうか」

私たちは自問した。

日本を知るためにはまず自分の目で実際に日本を見ることが必要だと言われて来日したが、この「日出づる国」に到着した私たちの口から出た言葉は「わあ！ あれはいったい何だろう」といった驚きの声ばかりであった。そしてこの先、どのような日々が待ち受けているのだろうかと不安と期待でいっぱいであった。しかしホテルメトロポリタンに着いて、たくさんの微笑み、お辞儀、「こんにちわ」の言葉に迎えられて、きっと私たちの日本滞在は素晴らしいものになると確信した。

共通プログラムでは日本の公務員制度、文化、歴史、政治、そして日本人について多くのことを教わった。早稲田大学や八千代国際大学の先生方の素晴らしい講義は、公務員として仕事上たいへん参考になった。

私たちは神社を見学し、てんぷら、さしみ、すし、お好み焼きといった日本料理を堪能した。ある時は日本人のボランティアの人と一緒に、彼らの助けでなんとか言葉の壁を乗り越えながら東京の街を一日中歩き回った。これは、これから日本国内をバス、電車、船等乗り継ぎながら研修旅行して回るための準備という意味でも、何をするにもものんびりしている私たちフィジー人にとってたいへん良い体験となった。

箱根での合宿セミナーでは明日の日本を担う日本の若者たちと、両国の公務員制度、文化、生活様式等について話し合った。また、スポーツや花火を楽しむ、カヴァ（フィジーの飲み物）やビールを酌みかわし、メケ（フィジーの踊り）や盆踊りを教え合い、会場はいつも私たちの笑い声で溢れていた。短期間ではあったが、両国の相互理解、信頼、友好を育む素晴らしいセミナーであった。

私たちはいろいろな乗物を体験したが、特に横浜

港での遊覧船と新幹線は忘れられない思い出となるであろう。静岡到着後5日間は雨であったが、そんなことは全然気にならなかった。副知事表敬、折紙・着物等の日本文化体験、料理交換会、様々な施設訪問、すべて楽しく有益なプログラムであった。

そして、ホームステイ。言葉では表現できないほど素晴らしい体験であった。また、県の職員の皆さんとの意見交換会では、県レベルの行政および公務員制度についていろいろと学ぶことができた。

旅の最後は楽しい視察旅行であった。京都では世界遺産に指定されている金閣寺等の神社や寺、広島では平和記念公園・資料館、大阪では海遊館（水族館）を見学した。

私たちはこの青年招へい事業を通して、日本人のありのままの生活を知ることができた。くりのみ幼稚園では園児たちに茶の湯を教わったり、日本の新しい友達とビールや酒で乾杯しながらいろいろな話をした。そして、連れて行かれたカラオケで自分たちに歌をうたう才能があることを発見した。非常に忙しい日程であったが、私たちの日本滞在は有益で日本理解の一助となった。私たちはできるだけ心を開いて新しいことを吸収するように努めた。国へ帰ってから今回の日本での経験を役立てたいと思う。

確かに私たちは30日間日本に滞在したのだ。この日出づる国に。この素晴らしい思い出の国に。

■太平洋諸国・地域

■ニウエ

太平洋センセイ

ジョニー・ヴァトラタ・リッチモンド・レックス
(太平洋混成 教員グループ)

親愛なる日本、

- ①私のように希望のない子が
一人で立っている
特別な日をまって
誰かに導かれる日を

(コーラス) 太平洋教員 私たちは未来
よりよきために学び
考えを分かち合おう
未来は我々の手に

- ②共に立ち上がろう
導きの灯をかざして
未来を輝かそう
子供たちに笑みを与えるため

- ③日本の人々そして日本政府
この機会に感謝します
知識の種をまいてくれた
私たちの心のなかに

(マロ・ツイアソソボ作)

上記の歌詞が示すように、私たち教員グループはこのプログラムを通して、自分自身、自分の生徒、そしてわが国を向上させるという使命を持って日本にやって来た。これは数えきれないくらいの太平洋諸国と日本との文化交流によって達成されるものだ。

日本到着時、私たちは好奇心でいっぱいの気持ちを持ち、何でも吸収しようという光に満ちあふれる太陽のようだった。太平洋タイムとはほど遠い東京の慌ただしさの衝撃の後、講義やセミナーを通して現代日本を掴み始めてきた。技術と経済力で世界を圧倒しつつも豊かな伝統文化を保持している国日本。ほとんどの「文化的」と言われる国が達成できない事例である。人を見てみよう。日本人は非常に礼儀正しく有能で完全時間厳守でフレンドリーだ。

訪問先の中でも心の琴線にふれた広島。破壊的な

原爆による人類の痛みと苦しみの歴史を目の当たりにした時は、涙なしで冷静にいることはできなかった。太平洋諸国では、ハリケーンやサイクロンの大惨事の後、葉はむしりとられても強靱なココナツは再生される。広島の人々にも同じたとえが言えよう。人類と世界の生存のため、すべての核兵器が廃絶されることを願おう。

学校訪問は素晴らしかった。東京の二葉小学校の生徒たちの熱気は私たちにも伝わってきたし、彼らの音楽的才能も忘れがたい。三重の帰学園での内気な男子生徒諸君が駆り立てられて騒ぎながらやったハカも忘れられない。男子生徒諸君、ラグビーをやらなくてラッキーだったな。施設、予算その他の点で日本の学校を羨ましく思う。それは太平洋諸国の学校では残念ながら不足していることだから。

数ある興味深いプログラムのなかで、全員が認めるホームステイ。なかには言葉の問題のある者もいたが、すぐに克服して、全員が日本の家庭、家族生活を楽しみ、心が豊かになった。私たちだけでなくホストファミリーの皆さんも、太平洋文化の知識を深めることができたと思う。

日本の皆さん、私たちは日本を訪問できてとても光栄でした。ドウモアリガトウゴザイマシタ。

心より アロハ!

■太平洋諸国・地域

■パプア・ニューギニア

私の冒険

ウィリー・エリウダ・エド
(公務員グループ)

今は、午後4時30分。ケアンズ経由成田国際空港行きの飛行機に搭乗アナウンスが流れた。友人や親戚たちの「さよなら」と言う声が遠くなるなか、私の体は、出発ラウンジに向けて歩み出す。喉に何か大きなかたまりがつかえるのを感じ、手は汗で冷たかった。自分の身体の反応は理解できなかったが、ただ分かっていることは、これから1カ月に及ぶ日本訪問という冒険に、せめて言葉が通じることを願っている、ということだった。

旅行の日程はとてもきつかった。政府の施設や、様々な国や地方政府の重要な事務官を訪ね、講義やセミナーに参加し、日本の文化や伝統の見聞を楽しんだ。教室でしか知り得ないところにも行った。

日本の発展はとても印象的だった。できることならば、日本にもっと長く滞在して、日本という独立国を長い間まとめあげるのに成功した日本の多くのシステムについてももっともっと学びたかった。

私たちの旅行の手配は、日本を発展に導いた日本人の効率的な文化の規範そのものだった。人々はとても友好的で思いやりにあふれていた。私もこの短い滞在の間に何人かと友達になった。しかし、彼らに別れを告げることは、いつまでたっても決して簡単なことではない。涙が流れるだろう。今、プログラムは終わろうとしている。でも私の冒険の温かい思い出だけは、永遠にそのままだ。さようなら。

私たちはひとつ

コリン・キングストーン・タイムバリ
(教員グループ)

パプア・ニューギニアに育った私にとって、話に聞いたり本や雑誌で読んだ日本は、赤い太陽の出づる、小さなおもちゃから巨大な船に至るまで何でも一級品を製造する、はるかな巨人の地でしかなかった。しかし、私がこれまで持っていた日本に対する

印象は、JICAの青年招へい事業のおかげで大きく変わる事となった。

日本の文化や人々のふるまい、生活様式全体もとても洗練されていて感心したが、なかでも日本人の実直さや他の人々に対する思いやり、敬意には大いに感動した。

850の言語や様々な文化が混在するパプア・ニューギニアと違い、共通の言葉と伝統があることが、日本の成長や技術発展の最大の要因ではないだろうか。

肌寒い7月の夏の午後、帯広空港に着陸しようとしている私たちの眼前には、喧騒の東京とはあまりに対照的な十勝平野の畑が見渡す限りに広がり、私たちを歓迎してくれた。

日本の穀倉地帯である帯広では、まっすぐな道路と新鮮な空気のほか、印象深いものが3つあった。私たちを温かく迎え入れ、家族同様に扱ってくださったホームステイ受け入れ家庭の皆さんたち。私たちの訪問に大喜びし、一緒に遊び、お別れの時は涙を流してくれた幼稚園や小学校の子供たち。そして何よりも、プログラムの企画・運営を一手に引き受けてくださった帯広青年会議所のメンバーの方々。仕事や家族がある身でありながら、私たちのグループのために多くの時間とエネルギーを費やしてくださったこの人たちには、感謝してもし尽くせないほどである。

広島もまた、たいへん貴重な経験だった。平和記念資料館への訪問で、私たちは核兵器の恐怖と悪夢を疑似体験した。1945年8月6日の出来事は、二度と繰り返してはならない。歴史的に貴重な展示品を集めた江戸東京博物館と帯広百年記念館も忘れがたい。わずか1時間ほどの訪問で、数千年に及ぶ日本の歴史を垣間見ることができた。

ハイヒール、タイトなパンツ、カラフルに染めた髪の毛、自転車、電車、高速道路、格好いい車、時間厳守の習慣、そして著……1カ月におよぶ日本滞在は、パプア・ニューギニアの静かで平和な海と険しい山々に囲まれてリラックスしたライフスタイルに慣れた私たちに、高層ビルという人造の森や、誠意のある愛すべき国民に出会う機会を与えてくれた。その結果、私たちの目は大きく見開かれ、もの見方もだいぶ変わった。

しかし住む国は違っても、世界は小さく、私たちはひとつだと感じさせてくれた1カ月だった。

■太平洋諸国・地域

■トンガ

日本での30日間

アピサケ・マカシニ
(太平洋混成 公務員グループ)

30日間にわたる日本滞在はユニークで、私の記憶にいつまでも消えずに残っているであろう、教育的な経験だった。日ごとにこの国の魅力的な面が目の前で明らかになっていった。私の第一印象で言うなら、日本の政治、経済、社会的システムは規律と統一性にあると言える。私が東京から広島まで旅をした時も人々の生活水準は等しく保たれていて、驚いたことに欧米の国々で時折見受けられるような極端に貧しい人々は日本では見られなかった。

多忙な日程によるストレスはあったものの、古くからの神社・仏閣などを訪れて日本文化の遺産を鑑賞したり、2000年、3000年の歴史のある大阪城や京都や宮島で数えきれないほどの写真を撮ったりすることで、精神的な経験をすることができた。ショッピングモールをぶらついたたり、100円ショップを覗いたりすることは面白い一方で、私にとっては一つのチャレンジでもあった。なぜならば、私の日本語の能力はとても限られていたので、平均的な市民との会話には限界があったからだ。

しかしながら、この旅で最も重要なことは、私たちが文化の違いにもかかわらず、喜びや苦しみの気持ちを分かち合い、夢を共有し合ったことだと思う。上尾市でのホームステイ、合宿セミナー、広島の大原資料館訪問で、私は平和への願いと友情への希求を強く感じた。青年招へい事業の参加青年として日本の方々と経験を分かち合えるという恩恵を与えられ、母国、トンガ王国の代表であることに名誉を感じている。また、個人的にも私はこのプログラムにおける自分の目的をすべて満たすことができたし、このプログラムで得たものはまさに千金に値するものと言えるだろう。

■アフリカ

■コートジボアール

日本の家族の思い出

セリ・ルマ・ジュヌビエーブ
(女性教員2グループ)

1997年10月16日、成田空港に到着した時、これから日本で過ごす1カ月間について、私はいろいろ思いをめぐらしていた。好奇心でいっぱい私だったが、プログラムの中にある、3日間のホームステイが気がかりだった。日本語も分からないで、見ず知らずの日本人の家庭で過ごせるだろうか。そして日本語学習で、家の中では靴を脱がなければならないことを習った時には、この儀式ばった習慣にうまくなじめるだろうか？ と私の不安はさらに増大してしまったのだ。

10月30日に、津山での歓迎会の席上、私のホストファミリーに初めて顔を合わせたのが、感じの良い方で、一日で好きになってしまった。私は安心して、「こんなに愛と理解のあるお宅でなら、ホームステイもそんなに難しいことはなさそうだ」と思った。

だが、事実は私の感じたこと以上だった。私がお世話になった方々は、素晴らしい人たちだった。寛大で、すべてを分かち合ってくれ、どうしてこんなにまで優しく気取らずいられるのかと思った。私と私の国に興味を持っていて、いろいろ質問され、初めて会ったとは思えないほど親しくなれた。最後の頃には、昔からの知り合いのようになっていて、お別れの挨拶をしたときには、両親と永遠に別れる子供のように、泣いてしまった。

実際には2泊3日しか一緒に暮らしていないのに……。

日本の私の家族と別れたこの瞬間を、私は決して忘れないだろう。

■アフリカ

■エジプト

私たちの心の日本

ノーハ・アハーメド・ケドル
(経済開発公務員1グループ)

発展、ハイテク、順調な経済、多数の善良な人々、文化、矛盾、広島、着物、これが私たちの来日前の日本に対するイメージだった。そして今!

私たちは極東に位置する日本を、このプログラムで初めて訪れた。そして地理的にも、文化的にも非常に遠い所からやって来たため様々な挑戦をすることになった。その挑戦は日本の人々と知り合い、寝食を共にすると同時に、アフリカの仲間とも同じことをするという意味で二重の挑戦になった。

私たち全員が大きな体験をしたと思う。全員が同じでないにせよ、皆それぞれ新しい体験だ。多くのものを見学し、大勢の人々に出会い、新しいことを試しつつ、一番大切なものを体得した。

そう、人は知らずに判断できないということ、たとえ同意ができなくともその違いを受け入れなくてはならない、そして知識には限りがないことを学んだのだ。

日本の人々との交流は最も大切なことだった。学生、公務員、そしてホストファミリーの人々に会った。それぞれの家に行き、楽しい時を過ごしながら意見交換をした。日本の人々が私たちにとって大切であったように、私たちも彼らにとって大切であったと思う。知ることは相互の通い合いだからだ。

わずか一枚の紙に私たちの体験を記すことはできない。この旅が楽しい教訓となって、あなた方と私たち自身、アフリカ各国の兄弟姉妹たちについて多くを体得できたことを感謝して終わりたい。

■アフリカ

■ギニア

無題

ディアロ・ウモ
(経済開発公務員2グループ)

私たちは青年招へい事業により、仏語圏アフリカ経済開発公務員グループとして来日した。この1カ月(10月16日~11月14日)のプログラムの、バラエティー、内容の豊富さが心に残っている。

共通プログラムでは、日本の文化、歴史、経済について知り、捉えることができた。講義や見学旅行は、私たちの仕事に関連する分野のものだったし、熱海や徳山での滞在は、非常に興味深く、印象深いものだった。徳山市長表敬訪問、郵便局、堀越窯元、日新製鋼、柳井発電所、西京銀行、大津島小学校への訪問、またホームステイも忘れ難いものとなった。(私たちの国とは違う仕事のやり方、たとえば、情報システム。家族を大事にすること、コメが主食であることなどは同じだった。)平和主義のシンボルであり核兵器拡散防止のために戦っている街、広島。そして歴史の街、大阪、京都も印象深いものだった。

私たちは、このプログラムが、日本青年のアフリカへの理解を深めるためにも、長く継続され発展していったほしいと願っている。

世界青年徳山友の会、そして私たちの日本滞在が快適であるように心を砕いてくださったコーディネーターに、仏語圏アフリカ経済開発公務員を代表して、お礼申し上げたい。

■アフリカ

■モーリシャス

日本—複雑な思いを秘めて

ヴィシュワニー・ルックヘナライン
(女性教員1グループ)

“長い”と思える1カ月の日本滞在を終えたいま、正直に言うと、1カ月もの間ずっと会えなかった私の愛する人々に会いたい、私の愛するところに帰りたいという気持ちでいっぱいだ。

しかし、一方でかつてとても遠く見知らぬ国だった日本が、今はとても身近で親しみを感じる。日本人は能率的で勤勉、時間厳守でしかも礼儀正しく、親切でとても謙虚だ。ここでの滞在を通しての毎日は、人生における貴重な新しい豊かな経験の連続だった。ときに、言葉の壁にいらいらすることもあったけれど、学校を訪問するなかで、なんとかそれぞれの国の教育制度についての見解を分かち合うことができた。

着物を着たり、天ぷらを作ったり、日本語で会話したことは、私がかれからずっと大切にしていきたい宝物のような思い出だ。また私の心は平和の国に釘付けになった。心がねじれるような広島での突然の死と困難な再生の現実は、単に消化するだけでもつらかった。

新しくできた友人たちをこの地に残していくことは悲しく心が痛む。特に、素晴らしかった私のホストファミリーやコーディネーターたちのように特別の友情を育んできた友人たちとの別れはとりわけつらい。

だから、相反するこの思いは両方とも本当だ。私の“短かった”日本での滞在の後、私の愛する人々と場所、しかも私の人生では二度と会うことのないであろうものを、後にすることはとてもつらいことだ。

■中南米

■ブラジル

本当に終わってしまったのだろうか

マルクス・ピニシウス・ホマノ・レモス
(中南米混成 社会福祉1グループ)

1カ月前、私たちは出会った。いろいろな言語で話し、共に笑った。時にはお互いを全く他人のように思うこともあったが、親友のように感じることもあった。私たちは共にたくさんのものを見、食べ物を味わい、様々なものに耳を傾けた。私たちは一緒に本当に楽しい時を過ごしたね。覚えていますか。

どうか地球市民としての役割を認識してほしい。国籍を持つのは、時には本当に大切なことだ（特にサッカーのワールドカップの時には……）。しかし、自分が人類の代表であることを、あなた自身の生き方の中で、本当に特別な存在であるということを考えてみてほしい。ご存じのように、人権問題に取り組みながら、私はこの思いをたくさんの人々と共有するよう努めてきた。そしてまた、ブラジルと呼ばれる世界の一地域に住む人々の生活環境改善のために、必死に取り組んできた。このような取り組みは皆さんの手で、それぞれの国で行われているのだろう。社会福祉は、ある意味で私たち全員を強く結びつける接着剤となるのだ。

日本と日本人について、私の印象はあまり改善されなかった。あまりにも狭い場所に、あまりにも多くの人が生活し、活動している。生活水準は高く、寿命も長いけれども、同時に高齢化社会や社会福祉に関する様々な問題を抱えている。社会福祉2グループに対しては、「どうか眠らせてください」と言いたい。すべてが終わった今、最後に尋ねたい。

「本当に終わったのだろうか」

■中南米

■チリ

分かち合った友情と忘れえぬ思い出

カルメン・グロリア・カレーニョ・アレジャーノ

(中南米混成 社会福祉2グループ)

この1カ月間、日本で暮らした印象と経験を書くようにとの大変な役目を仰せつかった。この仕事は難しいけれど、私にとってご褒美のようなものだ。というのは団体生活の総括に加えて、個人的な見解を述べることができるから。

人生は日常の細々とした試練と、経験から学ぶ幾つかの大きなことからなっているとの視点から私の日本の滞在をスケッチしてみよう。

日本で1カ月過ごすということは、日本を知り、日本について学ぶ唯一の機会だということは分かりきったことだが、私にとっては日本に着くまで全く見当もつかなかった。そして、とうとう、どんなことを学んだかが分かった。

いったい私たちは日本で何を学んだか。私たちは異なる社会様式、それも全く異なる社会様式、経験と、人々によって培われてきた1000年にわたる文化を少し知ることができたと思う。この人々がいなければこの文化はなかつただろう。同時に、日本の人々に私たちの生き方を見知ってもらって、相互理解が深まれば、そこに私たちラテン系のものの見方が大いに役に立ったと言えると思う。

違っているということは大切なことだが、同じだということもまた大切だ。共に分かち合うということはお互いのためになることだ。表現方法は違っても、ラテンの国も日本人も平和への願い、生きる喜びを共に分かち合う気持ちは同じだ。お互いの幸せのために知識や技術を分かち合うのも同様だ。

ラテンアメリカの人々と日本人とのあいだにいろいろな違いはあるが、沖縄で聞いた先生の言葉が印象深い。

「文化に善しあしはありません。ただ違いがあるだけです」

3. 合宿セミナー参加日本青年の声

私の大切な仲間たちへ～ありがとうの手紙～

矢嶋 恭子
(会社員)

“See you!”と言って別れてからそんなに経っていないのに、一緒にいたことがもう遠い昔のようです。夢を見ていたのかな？ 今あの時撮った写真を見ている。みんな素敵な顔をしています。2泊3日という短い時間の中でお互いを理解するために、いろいろな話をしましたね。その中で教えられたことがあります。それは、人が何かを伝えようとする時、言葉は手段でしかなく、伝えたいことと相手と心があって初めて言葉が生きるということです。私を含め多くの日本人が異文化との交流を難しいと感じるのは言葉が通じないからではなく、ただお互いの距離の縮め方を知らないだけだったのです。そのことを教えてくれた私の大切な仲間たちへ感謝の気持ちを込めてこの手紙を送ります。本当にどうもありがとう！

私が決心した日

菊池 由美子
(養護教諭)

「しまった!!」
これは私が初めて会場に入った時の第一印象です。「大丈夫だよ、英語なんてできなくても！ 通訳の人もいるから」

紹介者のセリフが頭の中をリフレインするけど、目の前に広がる光景は……まさに異国。

「失敗したかも？」と思っても後の祭り。あとはなるようにしかないと、腹を決めて参加させていただいた。

英語、英語、英語の嵐の中、不勉強な私はちっとも自分の考えを伝えることができない。同室になった方々にも迷惑をかけたかも……。

「今度はもっと英語力を上達させてから参加しよう!!」
強く心に誓った2日間でした。

ありがとうございました。

合宿研修で一緒だったみんなへ

石田 晃子
(社会人)

前略

その後みんな元気ですか。それにしても合宿研修の3日間はよく話をしたね。ディスカッションはもちろん自由時間でも、ホテルのあちこちに輪を作って、たとえば仕事のこと、経済のこと、お互いの国の印象、経済、家庭のこと、文化や生活のことなど、日常のありとあらゆる出来事について話したね。

私は最初、日本人として、一企業人として接していたように思う。でも、一緒に食事をして同じ場所で過ごすうちに、昔からの友達に再会したようなとても懐かしい気分になって、立場に関係なくひとりの人間として、みんなのことをもっと知りたいと思った。それはお互いに素顔で理解し合える、日常では得られない貴重な時間だった。だからあの感動を大切に、これからもずっと友達でいたい。この40人のネットワークをもっと強くしよう。どんどん広げていこう。

最後に、みんな体に気をつけて、また再会できる日を楽しみにしています。

かしこ

「違う」から楽しい

博松 仁子
(教員)

9月6日から8日までの3日間、世界青少年交流協会主催のインド教員との合宿セミナーに参加した。東京都の海外派遣プログラムで数年前、韓国、アメリカ、オーストラリアの学校視察、イギリス、アメリカでの短期留学で現地の方との交流を経験し、今回やっとインドの方との交流を持つ機会に恵まれた。折しも、7日朝、マザーテレサの訃報に接し、討議の初めに2分間の黙祷をしながら、このプログラムが私のインドとの関わり方の始まりに思えて、この機会が与えられたことに感謝の念を強くした。

さて、もののとらえ方は人それぞれであるが、日本人も民間会社員・学生・指導主事・小学校教員・中学校教員・高校教員と違い、教科・興味・専門・経験・外国との関わり方の相違がある。インドの参加者は全員インドの理科教員で、住む地方は様々である。インドそのものが日本の9倍という広さであり、自然環境・民族・宗教・言語・習慣が違うことからすると、テーマを一つに絞ったところで、合意点に達することは難しい。ここで数字という便利なものが登場するが、それとて、定義を擦り合わせる必要がある。そして英語の通訳が付いたが、英語・日本語によるストラテジーの違いに対応が違ってくる(彼らは英語での討論が全員可能なのである)。日本人の一般的な反応との「相違点」を発見するたびに「どうして?」と考えることは楽しかった。「違うのが当たり前」を前提に議論し合えたことは貴重な体験だった。このやり方で、日本の「いじめ」も解決できると思う。「違う」ことを認め合うことこそ大切なのだ。やはり私はもっと多くを見るために、実際に自分の目で確かめるために、インドへ行こうと思う。

インドには菜食主義者が多いがその理由は、日本人は一般的に宗教に起因するとしているが、もっと

現実的で、その地方その環境に合った食生活をしているようで、「日本人が彼らについて理解していることは10年以上前の姿であり、インドは急速に発展している」ということを確認して、親しくなったインド人と互いに大笑いをした。

館山に吹き荒れた南国の熱い風

三幣 昌宏
(教員)

スリ・ランカの熱血教員が館山にやってきたのは9月5日のことだ。私は日本側メンバーの一人として参加した。スリ・ランカの学校制度、日本の学校制度、日本の子供の現状を討論するなかで、ひとつ印象に残ることがあった。私のグループの敬虔なムスレムのルワイダさんが「私が夜、池袋を散歩していたら、制服を着た女の子が男性と腕を組んでラブホテルに入る姿をみた。あなたの気持ちを確認したい」と言い出し、私は頭を抱え、通訳の人は天を仰ぐ始末。通訳の協力により何とか彼女に説明し「分かりました」と理解してもらえた時には、ホッとした。そのルワイダさんが、文化交流の時間、カラオケにヌードが映ったとたん脱兎のごとく逃げていく姿をみて、敬虔なムスレムであることを再認識したとともにみんなの爆笑を誘ったことが印象に残っている。熱き想いをぶつけ合った、夢のような3日間だった。感謝しています。

百聞は一見にしかず、そして百見は一會にしかず…?

石川 由美子
(会社員)

ASEAN6カ国から訪れた青年たちは、本や新聞やテレビからは得られない大事なことを教えてくれた。言葉や食べ物、宗教や文化。国によって違いは様々だ。でも、大切なのは、違いを探すことではなく、みんな同じだということ知ることだ。今回のテーマである「環境問題」は、全世界共通の問題だが、各国によって状況が異なり、それぞれの事情を抱えて

いた。でもこの地球に生きる仲間として、それぞれの国のそれぞれの立場で、地球を守るためにできることをしよう。そんな気持ちでセミナーを終えることができたと思う。セミナーの後では、ASEANの国々がとても身近に感じられ、ニュースや新聞の記事を見ても、もう他人事ではなくなっていた。We will never forget you! 遠い島国より、みんなの活躍を祈っています。

ちょっとした国際理解の過程

金子 治生
(公務員)

スポーツ（バレーボール）交流で爽やかな汗を流した後、同室のソンさんを宿舎の「大浴場」に誘おうということになった。

「大きな風呂へ行こう」。身振り手振りを駆使するのだがどうもうまく通じない！ キョトンとするソンさん。ついには、半ば強制的にバスタオルを担がされ、数人の屈強な日本青年にガードされて「大きなお風呂」へと連行されてしまったのだった。

翌朝。陽気な鼻歌で目覚める。「さあ、行くぞ」とばかりに、バスタオルを肩にかけ、ニヤリと笑ってドアを指さすのは意外にもソンさんだった。昨晚の強制連行にもかかわらず、「大きな風呂」を気に入ってくれたらしい。

日本流の「裸と裸の付き合い」を通じ、ソンさんが日本と日本風呂の大ファンになったことは確かなようだ。なぜなら、ソンさんはその夜も私を「大浴場」に誘い、日本情緒にどっぷりと浸かりながら、例の陽気なヴィエトナムの鼻歌をうなってくれたのですから。

インド理数科教員受け入れについて

宮本 ます美
(教員)

「習字を書いてみますか？」

4年生の教室で、インドの先生方が筆を持ち、子供たちと一緒に書き始めた。ごちない筆づかいと思いきや、なんと見事な作品を仕上げた。4年生の子供も大喜び。日本古来の習字を説明することもなく、体験によって、「習字」のよさをインドの先生方自らが、学びとった楽しさを目のあたりにすることができた。また、インドの先生方は、数のパズルをしてくださり、どの子も興味をもって取り組んでいた。さすが、理数科の先生だ。子供に思考することの楽しさを教えてくださった。

全体交流会では、お互いの国の踊りを一緒に踊った。「春駒」を繰り返すうちに、すっかり覚えて、体で十分に表現していた。フェアウェルパーティーの最後の日に、岐阜や大垣を訪れたインドの理数科の先生全員とともに、「春駒」を踊ったのも印象に残っている。

食文化がそれぞれ異なるのは当然だが、感覚だけでは述べられない。インドというと、辛い物が好きな国と思われがちだが、紅茶にはたっぷりのお砂糖を入れ、バターたっぷりのクッキーを好むことなど、初めて分かった。ウーロン茶より、普通の水を好み、ピザ類やナンなどを好んで食べ、もてなす時の心配りを学ぶことができた。

セミナーでは、お互いの国の教育について語り合い、「子供のために」を合言葉に熱い討議が展開された。

世界はひとつ。

多くの方々と言葉や文化の違いを乗り越え、これからも積極的に国際理解教育に取り組んでいきたいと願っている。

21世紀は、もうすぐそこまで来ている。小さなぬくもりと、大きな志をもって、子供たちが勇気と自信を支えられて世界に活躍することのお手伝いをしていきたいと思う。

4. ホストファミリーの思い出

私の新しい家族 “ヒシャム”

阿部 元子
(福島県)

彼と過ごした時間はたいへん短く、とても速く感じた。受け入れる前は食事・宗教・言葉等々心配だったが、彼と会った瞬間不安がすべて飛んでしまった。私たちの片言の英語も一生懸命理解してくれ、毎晩いろいろなことを話し合いながら、家でゆっくり食事をとり、楽しい時を持つことができた。剣道をしている友人が道具一式を持参し、彼に着せてくれた際、違和感がないので驚くと同時に、改めて同じアジアの国の人なのと思った。彼がホテルに戻る朝、日本語でお礼の言葉を言ってくれた。私たち家族がもっと英語が話せると、お互いもっと理解し合えたのにと残念である。さようならパーティー後の寂しさは忘れられない。帰宅後まで泣き続けた娘のためにも、いつの日か遠い家族に会いに行きたい。

忘れられないカレーの味

鄭 珠美
(静岡県)

対面式でブラカシュに会うまでは緊張した。フィジーについての知識はまるでなかったからだ。対面式で会った時、優しそうな人だなあとホッとした。3日間ずっと雨であまり遊びに行けなかったりで、子供とトランプで遊んだり、私が作る料理を「おい

しい」と言って箸を使って食べていた。彼はインド系の人でフィジーから持って来たカレーの材料でおいしいカレーを作ってくれた。汗をふきふき一生懸命作ったカレーは本当においしかった。夜はフィジーについて、日本についてたくさん話した。私もフィジーに行きたいと言ったら「MUST」と言って、「フィジーに来たらぜひわが家にホームステイしろ」と言ってくれたのだ。うれしかった。

私の家庭に家族が増えた

入宮 俊忠
(香川県)

今回、初めてのホームステイ受け入れで、フィリピンの女性を迎えることになった。私たち夫婦は、国際的な情報を得、国際的な考えを持とうと思い、「外国人による弁論大会」を毎年開きに行ったりしていた。初めてのホームステイの受け入れを間近に控えて、不安が目ごとに広がり、どのような会話を、どのような食事を、風呂は、食後は、どこに連れて行けばいいのか、あらゆることを考え、非常に不安だった。さて当日、彼女と会った瞬間、彼女の明るい性格が、何かすべての不安を吹き飛ばしたような気がした。少しでも日本人の気持ちを分かってもらえたらと思い、彼女の英語に、紙とペン、英和辞典、和英辞典、英語日常会話の本、と、あらゆるジェスチャー、ランダムな英単語で対応した。昔、テープで、またNHKのテレビで英会話を勉強したのだから、すべて忘れていた。今は、帰国した「チェチェ」が自分の娘・家族のような気がする。

インド青年のホームステイ

河合 恒
(岐阜県)

岐阜県世界青年友の会主催による青年招へい事業の地方プログラムが岐阜県で行われるということで、郡上八幡国際友好協会からインド青年のホームステイのホスト家庭のお誘いを受け、少しでもお手伝いできればと思い、引き受けさせていただいた。実は、今回で3度目のホスト家庭となる。

最初の受け入れは白鳥町よりホスト家庭の募集があった。当時、娘がオーストラリアに留学中であり、異国でホームステイでお世話していただいている恩を少しでもお返しできればと思い、アメリカ人男性をお世話した。2度目もやはりアメリカ人で女性だった。

今回はインドということで、人種的にも宗教的にも初めて体験することばかりだった。アメリカ人の場合は長期滞在で、しかも大学で日本語を専攻しており、かなり日本語を話せたので普段の生活に困ることはなかった。

しかし今回は、教育に関する視察および研修が目的だということだった。アメリカ人ほど、英語は堪能ではなかったが、同じ人間同士、身振り手振りでなんとか通じた。

一番気をつけたのはやはり食事だ。インドという国は歴史のある国で、宗教上の習慣が生活を支配して、特に牛は古来神獣として尊敬されていることから、殺すことさえも禁じられ、当然牛肉、豚肉等は食べない。日本人は肉類、魚類も大いに好むが、宗教上とはいえ食事に制限があるということはずらいものだ。

今回のインド青年は理数系の先生で、気品があり、民族衣装のサリーがとてもよく似合う素敵な女性だった。同町内でホームステイしたもう一人の男性は、とても陽気で子供好きな青年だった。両家族で大和町の古今伝授の里、また郡上八幡城や大滝鍾乳洞へ行き、日本の歴史や文化を少しだけ体験していただき、彼らも非常に喜んでくれ、とてもうれしかった。

2泊3日とはいえ、実質1日半の日程だが、国を超え、言葉を超えて人間対人間、心と心が通じ合っ

ただけに、最後の日の別れは何回ホスト家庭をしてもつらいものだった。

彼らが帰国しても日本の思い出として心に少しでも残してくれることを望んでいる。最後になったが、良い機会を与えてくださった、郡上八幡国際友好協会の皆様に感謝しつつ筆を置く。

同協会、岐阜県世界青年友の会、そしてJICAの今後の益々のご発展を祈っている。

イスラム教の男性

稲村 健児
(新潟県)

男は皆、髭をたくわえ、宗教を生活の根幹にして、決まった時間に祈る、私の中のパキスタン。

なまりのある英語を話すマスードと、英語を話せない私たち家族。思いや意思を伝えることの難しさ、食事の違い、日本食を経験させたいが、これがダメ、あれがダメとかたくなに食べようとしない。宗教がもつ力を肌と感じた。

別れの時、9歳の長男が泣き出してしまい、驚いた。マスードとは、楽しく遊んだわけではなく、私のうしろについて歩いていた長男だけに、出会いと交流、時間の長さや言葉の違いを超えた人と人の結びつきについて新たに考えさせられた今回のホームステイだった。

わが家のもう一人の娘

西脇 妃登美
(愛知県)

わが家にタイの女性ノーリーさんが2泊3日のホームステイをした。わが家の7歳になる娘は、ノーリーさんを慕い、まるで姉ができたかのように、何をすることも一緒に、タイの食事を作ったり歌を教えてもらったりと楽しい3日間だった。

わが家での3日間をどのように過ごしていただこうか、受け入れ前に家族でいろいろ話し合った。彼女は彼女なりに不安を抱き、どんな家庭なのか、3

日間言葉の問題はどうなるのか、など……、友人たちと深夜遅くまで会話をし、当日を迎えていたことを後で知った。これらの気苦労も今となっては笑い話である。

彼女との出会いは、私たち家族にとって一生忘れがたい出来事であり、とても自然な形で彼女を受け入れることができ、ショッピングや食事などすべてに関して娘が一人増えたかのように感じられた。私自身、受け入れ前の不安な気持ちを思うと、今に至っては「案ずるより産むが易し」であると感じている。そして、タイのことをもっともっと知り、いつの日か訪問してみたいと、意欲とともにたくさんの希望を与えていただいたことに感謝している。

このホームステイを通して、私たち家族にとって今までとは違う明日への第一歩を迎えることができたのをとてもうれしく感じている。

この喜びをたくさんの人にも、体験してもらいたいと思う。

ジャラン・ジャラン……

高田 照子
(北海道)

突然、聞いたことのない言葉が……。

皆、一瞬目が点になってしまった!! ブルネイから来る「フン」さんに今まで見たことがないものを見せ、いろいろな体験をさせてあげたいと家族で計画を立てた27日の「小樽」水族館経由「余市」行きの日のことです。

木になっている「りんご」「なし」「ぶどう」「桃」等、日本の果物を自分の手で取って食べさせてあげたい。どんな顔をするだろう。きっと感動するよ、きっと思い出に残るよ。そんな気持ちで余市の叔父の家へ行ったのだ。ひと休みをしていた時に「ジャラン、ジャラン……」。その言葉は叔父の口から出たのでした。「雨が降らないうちに果樹園を歩きまわっておいで、果物を取って食べなさい」という意味らしいのです。聞くと55年も前にマレーシアで2年半働いていたそう。72歳の叔父は半世紀以上もの長い間眠っていた記憶が少しずつもどってきたようだ。もつれた糸がほどけるようにマレー語で話し始めた。

「フン」もおしゃべりができてとてもうれしそうだった。

アフリカ人の前向きな生き方を知って

多田 清美
(大阪府)

今回初めてホストファミリーを経験した。アフリカ大陸のボツワナの地理を知ることから始まり、3分の1は砂漠、村の人は川まで水をくみに行き頭の上のせて運ぶ、町の生活は日本とほとんど変わらないようだが、ただ結納の時は旦那さんとお嫁さん側に牛を偶数頭(約2~4頭)贈る風習があるということなどを教えてもらった。でも一番感動したことはボツワナ人の前向きさ、自国、アフリカ大陸に誇りを持っているということだった。妻、母、教師と一人3役もこなし、超多忙にもかかわらず、新しい勉強を始めるという。性別や職業に頼ることなく意気揚々とされていて、またがんばる女性に対して温かく理解している家族や環境が整っているということに深く感動した。私自身ももっと日本を好きになりたいと改めて思った。

貴女の笑顔を決して忘れない

鳥取 文二
(岡山県)

初めてホストファミリーを引き受けることとなり、家族の心配する生活習慣の違いと言葉の障害の中で、度胸だけで何とかかなと思った。それでも妻に英語力はどのくらいあるのかと真剣に聞いている自分も緊張しているのが分かった。

そして、いよいよ彼女を迎える日、ホームステイの3日間どうなるか楽しみと不安でいっぱいだった。わが家族の不安より、フランス語は全く分からず、英語も片言しか話せない家族を相手にする彼女の不安は大変なものがあったと察しができた。それでも笑顔を絶やさず英単語を並べるだけの会話で、お互いに気持ちが通じ合い、彼女の聡明で誠実な人柄は

時間の経過とともに私たち家族を魅了していった。

日本文化に深い興味を示す彼女を地域の公民館祭り、ガレージセール、城東むかし祭り、と案内する方も楽しく過ごすことができた。また、近所の人や地域の人々など、会う人ごとにアフリカのお客さんを紹介したので、彼女はどんどん友好を広げていった。

全く知らなかったコートジボアールの様子を生の声で聞くことができ、感動と同時に私たち家族を含め日本人が今後何に取り組めばいいのか深く考えさせられた。アビジャンでの再会を約束し、彼女は笑顔を残して帰国していった。アフリカの地にも大きなヒマワリの花を咲かせてと種を託した。

思い出に夢をのせて

岩立 史代
(愛知県)

わが家にホームステイしたレザングさんが作ってくれた料理は「生あげと白菜のカキ油いため」など3品。生あげがマレーシアにあること、味覚がとてもよく似ていて、おいしくいただけしたことなど、意外な発見があった。そして食後には、ダンスや歌にみんな汗をかくほど熱中し、わが家は一時マレーシアになった。

3日間、いろいろな話に花が咲いた。インドネシアの森林火災の影響、両国の教育制度、基地問題……そして新婚の奥さんののろけ話。あっという間に、夜も更けた。

レザングさんのおかげで、わが家にとってマレーシアはとても身近な国になった。この出会いが、より深く強く育ち、国と国とを結ぶ絆になっていったらと、夢は広がっていく。素敵な出会いをどうもありがとう。

JICA関係機関連絡先

★JICA研修事業部青年招へい課

〒151-8558 東京都渋谷区代々木2-1-1
新宿マインズタワー
TEL 03(5352)5402~5403

★JICA国内支部・センター

北海道国際センター (札幌) 〒003-0026 北海道札幌市白石区本通16丁目南1-25
TEL 011(866)8333
FAX 011(866)8382

北海道国際センター (帯広) 〒080-2470 北海道帯広市西20条南6-1-2
TEL 0155(35)1210
FAX 0155(36)2582

東北支部 〒980-0811 宮城県仙台市青葉区一番町4-6-1
仙台第一生命タワービル15階
TEL 022(223)5151(代)
FAX 022(227)3090

二本松青年海外協力隊訓練所 〒964-8558 福島県二本松市永田字長坂4-2
TEL 0243(24)3200(代)
FAX 0243(24)3214

筑波国際センター 〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-6
TEL 0298(38)1111(代)
FAX 0298(38)1119

関東支部 〒336-0002 埼玉県浦和市北浦和4-5-5
北浦和大栄ビル7階
TEL 048(834)7770(代)
FAX 048(834)7775

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂15
TEL 0265(82)6151(代)
FAX 0265(82)5336

北陸支部 〒920-0853 石川県金沢市本町1-5-3
リファレビル3階
TEL 0762(33)5931(代)
FAX 0762(33)5959

東海支部 〒460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内2-4-7
愛知県産業貿易西館内
TEL 052(221)7103(代)
FAX 052(201)9516

大阪国際センター 〒567-0058 大阪府茨木市西幾田町25-1
TEL 0726(41)6900(代)
FAX 0726(41)6910

中国国際センター 〒739-0046 広島県東広島市鏡山3-3-1
TEL 0824(21)6300(代)
FAX 0824(20)8082

四国支部 〒760-0050 香川県高松市龜井町5-1
百十四ビル13階
TEL 0878(33)0901(代)
FAX 0878(37)0747

九州国際センター 〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1
TEL 093(671)6311(代)
FAX 093(663)1350

沖縄国際センター 〒901-2352 沖縄県浦添市字前田143-1
TEL 098(876)6000(代)
FAX 098(876)6014

★JICA Head Quarter

Youth Invitation Division, Training Affairs Department
SHINJUKU MAYNDS TOWER
1-1, Yoyogi, 2-chome, Shibuya-ku,
Tokyo 151-8558

★JICA Branch Offices and International Centers in Japan

Hokkaido International Center(Sapporo)
Minami 4-25, Hondori-16 chome,
Shiroishi-ku, Sapporo-shi, Hokkaido 003-0026

Hokkaido International Center(Obihiro)
Minami 6-1-2, Nishi 20 Jo Obihiro-shi,
Hokkaido 080-2470

Tohoku Branch Office
Sendai Daiichiscimei Tower Bldg., 15F
4-6-1, Ichiban-cho, Aoba-ku, Sendai-shi,
Miyagi 980-0811

Nihonmatsu Training Centre
4-2, Nagata-Azanagasaka,
Nihonmatsu-shi, Fukushima 964-8558

Tsukuba International Center
3-6, Koyadai, Tsukuba-shi,
Ibaraki 305-0074

Kanto Branch Office
Kita-urawa Daiei Bldg., 7F
4-5-5, Kita-urawa, Urawa-shi,
Saitama 336-0002

Komagane Training Centre
15, Akaho, Komagane-shi,
Nagano 399-4117

Hokuriku Branch Office
Rifare Bldg., 3F
1-5-3, Hon-machi, Kanazawa-shi,
Ishikawa 920-0853

Tokai Branch Office
Aichi-ken Sangyoboeki-kan Nishi-kan,
2-4-7, Marunouchi, Naka-ku, Nagoya-shi,
Aichi 460-0002

Osaka International Center
25-1, Nishi-toyokawa-cho, Ibaraki-shi,
Osaka 567-0058

Chugoku International Center
3-3-1, Kagamiyama Higashi-hiroshima-shi,
Hiroshima 739-0046

Shikoku Branch Office
114 Bldg., 13F
5-1, Kamci-cho, Takamatsu-shi,
Kagawa 760-0050

Kyushu International Center
2-2-1, Hirano, Yahata-higashi-ku,
Kita-kyushu-shi, Fukuoka 805-8505

Okinawa International Center
1143-1, Aza Maeda, Urasoe-shi,
Okinawa 901-2352

★JICA在外事務所

JICA Indonesia Office

JL.M.H. Thamrin 59, Jakarta Pusat,
Indonesia
TEL 62-21-390-7533

JICA Malaysia Office

Suite 18. 1W, 18th Floor, Wisma Sime
Darby, Jalan Raja Laut,
50350 Kuala Lumpur, Malaysia
TEL 60-3-2935116

JICA Philippines Office

12th Floor, Pacific Star Building, Sen. Gil
J. Puyat Avenue Extension Corner,
Makati Avenue, Makati City, Philippines
TEL 63-2-893-3081

JICA Singapore Office

Room 801, RELC Building 30,
Orange Grove Road, Singapore 258352
TEL 65-7340177, 7340706

JICA Thailand Office

1674/1, New Petchburi Road, Bangkok
10320, Thailand
TEL 66-2-251-2735, 251-2450

JICA Fiji Office

7th Floor, Dominion House, Suva, Fiji
TEL 679-302522, 301829

JICA Papua New Guinea Office

Shop 7A, Second Floor, Garden City, Lot 4,
Section 18, Angau Drive, Boroko,
National Capital District,
Papua New Guinea
TEL 675-325-1699

JICA Samoa Office

Mulivai, Apia, Samoa
TEL 685-22-572

JICA Bangladesh Office

Plot No.N.W.(C)1, Road No.62/63,
Gulshan, Dhaka-1212, Bangladesh
TEL 880-2-873353

JICA India Office

2nd Floor, DLF Centre, Sansad Marg,
Parliament Street, New Delhi-110001, India
TEL 99-11-331-1990~4

JICA Nepal Office

Tripureshore, Kathmandu, Nepal
TEL 977-1-211126, 228088

JICA Pakistan Office

House No.1 Street No.61,
F-6/3 Islamabad, Pakistan
TEL 92-51-829473~8

JICA Sri Lanka Office

58/A, Horton Place,
Colombo 7, Sri Lanka
TEL 94-1-681247~51

JICA Myanmar Office

No.73, University Avenue,
Yangon, Myanmar
TEL 95-1-530092

JICA Côte d'Ivoire Office

(JICA en Côte d'Ivoire)

7, Boulevard Roume, Abidjan, Côte d'Ivoire
TEL 225-222290, 222203

JICA Egypt Office

World Trade Center, 10th Floor
1191, Corniche, El Nile St.,
Boulak, Cairo, Egypt
TEL 20-2-5748240~2

JICA Ethiopia Office

Woreda 17, Kebele 17, House No.222,
Addis Ababa, Ethiopia
TEL 251-1-615562

JICA Ghana Office

Valco Trust House, Castle Road,
Ridge, Accra, Ghana
TEL 233-21-238419~238422

JICA Kenya Office

Utumishi Co-operative House,
3rd Floor, Mamlaka Road,
Nairobi, Kenya
TEL 254-2-724121~4, 724877

JICA Malawi Office

Area 13-Plots 5 and 6, Development House
Ground Floor Lilongwe 3, Malawi
TEL 265-781644, 781945

JICA Morocco Office

(Bureau de la JICA au Maroc)

28, Rue Béni Boufrah, Lotissement
Ghandouri, Souissi, Rabat, Maroc
TEL 212-7-659376~9

JICA South Africa Office

1st Floor Bank Forum Building,
Corner Lange & Fihnsen Street,
New Muckleneuk, Pretoria,
Republic of South Africa
TEL 27-12-346-4493, 4528, 4896

JICA Senegal Office

(Bureau de la JICA au Sénégal)

Immeuble SDIH, 3 Place de
l'Indépendance, Dakar, Sénégal
TEL 221-821-33-66, 821-69-19

JICA Tanzania Office

Plot No.1033/1, Mindu Street,
Upanga Dar es Salaam, Tanzania
TEL 255-51-113727

JICA Tunisia Office

(Bureau de la JICA au Tunisie)

18, Rue Ahmed Rami, 1002
Tunis-Belvédère, Tunisie
TEL 216-1-786386, 785295

JICA Zambia Office

Plot No.59B Mutandwa Road, Roma
Lusaka, Zambia
TEL 260-1-291075

JICA Zimbabwe Office

Southampton Life Center, 8th Floor, 77
Jason, Moyo Avenue, Harare, Zimbabwe
TEL 263-4-727269, 721952

JICA Viet Nam Office

6&7 Floor, C2 Thanh Cong,
Giang Vo Road, Hanoi, Viet Nam
TEL 84-4-8310004~6

JICA Cambodia Office

House No.36, Street 184, Sangkat Phsar Thmei
3, Khan Don Penh, Phnom Penh, Cambodia
TEL 855-23-211673, 211674

JICA Laos Office

House No.351, Unit 24,
Saysettha District, Vientiane,
Lao P.D.R.
TEL 856-21-414387, 412695, 412691

JICA Mongolia Office

Zaluuchuudin Street 24, Ulaanbaatar,
Mongolia
TEL 976-1-325939

JICA Chile Office

(Agencia de Cooperación Internacional del Japon)

Av. Andres Bello 2777,
piso 27, of. 2701,
Las Condes, Santiago, Chile
TEL 56-2-203-3095

JICA Panama Office

(Agencia de Cooperación Internacional del Japon en
Panama)

Edificio World Trade Center Panama,
Piso 4, Calle 53E,
Urbanización Marbella, Ciudad de
Panamá, República de Panamá
TEL 507-264-9669

JICA Brazil Office

(Escritorio Anexo da Embaixada do Japão)

SCS Quadra 01, Bloco F,
Edificio Camargo Corôa, 12^o andar
Brasilia, D.F. Brasil
TEL 55-61-321-6165

JICA Peru Office

(Agencia de Cooperación Internacional del Japon)

Av. Angamos Oeste 1381, Santa Cruz,
Miraflores, Lima, Perú
TEL 51-1-221-2433

JICA Honduras Office

(Agencia de Cooperación Internacional del Japon)

Casa #1316
Calle Santa Rosa, Colonia Lomas
Del Mayab, Tegucigalpa M.D.C.,
Honduras
TEL 504-32-6727

JICA Mexico Office

Ejército Nacional #418-201,
Col. Chapultepec Morales, México,
D. F., C.P. 11570
TEL 52-5-5452476

青年招へい事業—アジア・太平洋・アフリカ・中南米諸国—[交流レポート] (1997)

平成10年3月31日

発行 国際協力事業団研修事業部青年招へい課

〒151-8558 東京都渋谷区代々木2丁目1-1

新宿マインスタワー

電話 (03)5352-5402～3

編集 財団法人国際協力センター国際交流部

〒163-0409 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル9F

電話 (03)5322-2561

無断転載を禁じます。

